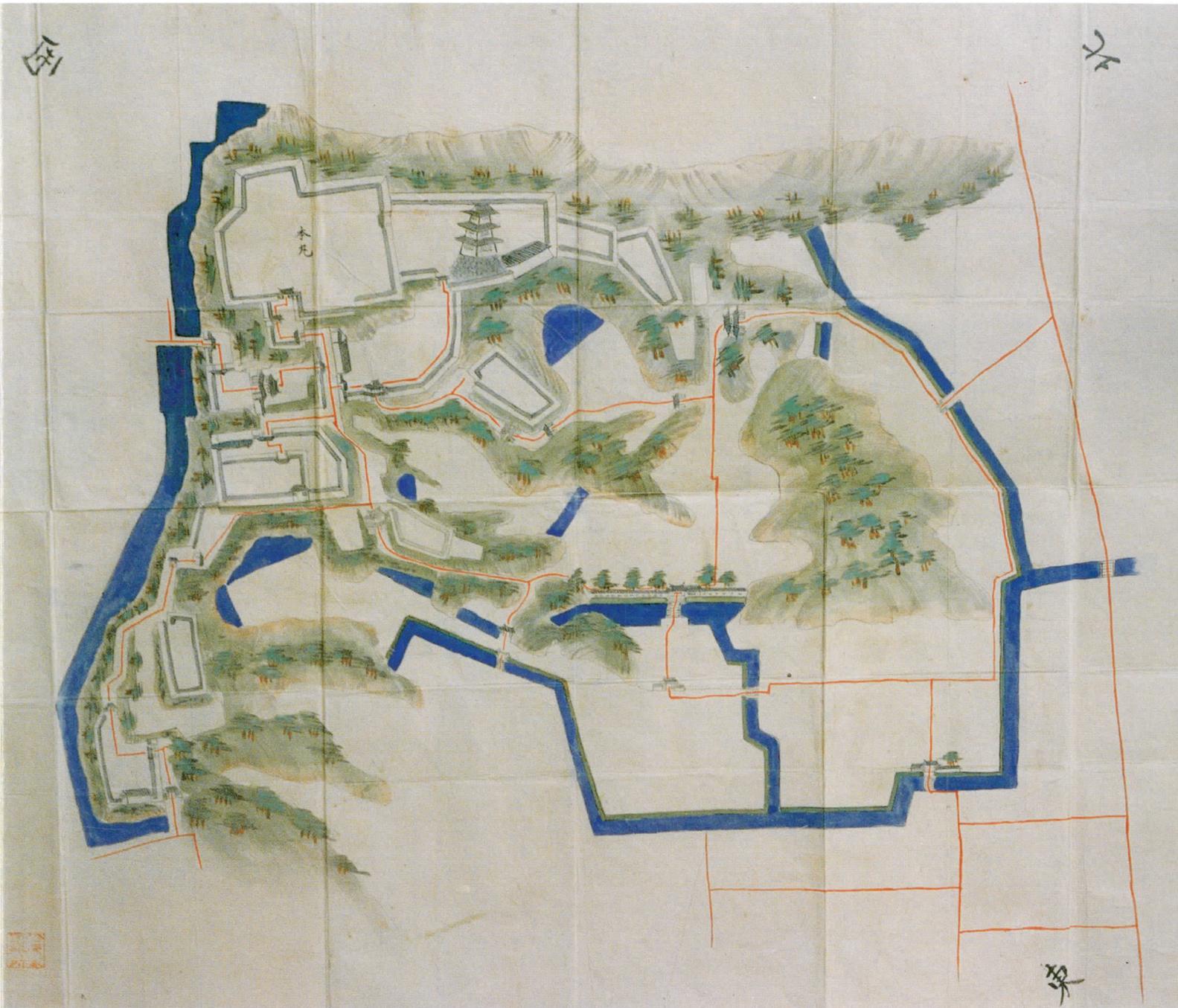


佐土原町の中・近世城館



天正年中佐土原城下絵図

宮崎県宮崎郡佐土原町教育委員会

2005

序 文

佐土原町は、古代、延喜式にも記載されているように交通の要衝として重要な位置を占めていました。中世になりますと、源頼朝から日向の地頭職に任命された工藤氏の一族である田島氏が勢力を拡大して佐土原城を築いたといわれています。その後、佐土原は田島氏から伊東氏へさらに島津氏へと支配者が変わり、その間いくつかの城館が築かれました。その城館数は十六城にも及ぶとのこと。

城館の中心である佐土原城は、平成16年9月30日付けで国の指定を受け平成17年度から平成18年度にかけて「佐土原城跡保存管理計画書」を作成しているところです。今後は、佐土原城跡保存整備を進める上で、事前に佐土原町内の城館を把握することが円滑な事業の推進となります。

そこで、平成12年から平成16年にかけて当教育委員会が実施した町内城館十六城の縄張り図作成調査の成果を今回報告書としてまとめました。

最後に、ご多忙の中、繁茂する草木をかき分けて踏査され図面を作成していただきました八巻先生をはじめ、ご指導下さった宮崎県教育庁文化財課や貴重な情報を提供下さいました地元の皆様に深く感謝申し上げます。

平成17年11月30日

佐土原町教育委員会
教育長 菊池俊彦

例 言

- 1.本書は、平成12年度から平成16年度にかけて佐土原町内の城館の縄張図作成を行い、平成17年度に成果をまとめた報告書である。
- 2.本書は城館一覧、同分布地図、関係文献、中・近世城郭の解説と図面および写真からなっている。
- 3.城郭の位置を示す位置図は、それぞれの城館の項目の初めに掲載した。これは国土地理院発行の2万5千分の1の地形図の一部を原寸で入れたものである。そのため方位は全て上が北になる。
- 4.本書掲載の縄張図および解説文等の執筆は、中世城郭研究会の八巻孝夫氏に依頼した。文献解説については、当館学芸研究員末永和孝が執筆した。その他は、木村明史が担当した。
- 5.本書掲載の縄張図は、現地調査により、遺構もしくは遺構の可能性のあるものを図化したものである。縄張図は地表面観察により歩測とコンパスによって計測し図化、それを佐土原町発行の都市計画図2万5千分の1の地形図に載せたものである。
- 6.本文掲載の遺構の写真は天守台や瓦片を除き八巻孝夫の撮影によるものである。航空写真は佐土原町教育委員会の委託により、九州航空株式会社によって撮影されたものである。
- 7.掲載した絵図の所蔵者は次の通りである。
 - 「天正年中佐土原城下絵図」…日南市教育委員会所蔵
 - 「明治三年廃城後図」……………日南市教育委員会所蔵
 - 「日向国佐土原城」……………国立国会図書館
 - 「慶長日向国絵図」……………臼杵市教育委員会
- 8.本書の編集は、佐土原町教育委員会、木村明史主幹が行った。

(注) 城郭の縄張図については、一般に知っている人が少ないと思われるので、簡単に紹介したい。縄張図とは、城郭の構造(堀などがどのように使われているか、虎口(城の出入り口)がどこにあるかなど)を細かく図面化したものである。現在の遺構が残っている城に行き、地表面観察により、歩測し、方位を調べるなどを行い、つくりあげていく。縄張図の利点は、城郭の構造を研究するために特化した図なので、遺構が理解しやすい上、それぞれの遺構の総合的な意味がわかる場合もある。そのため城郭の構造研究には不可欠な研究法とされる。しかし、一方で精密な測量ではないので、形が不正確になる場合もあり、また表面観察によるため、地下に埋もれた遺構は当然ながらわからない。そのため、どうしても軍事的な考察にかたよりがちな面が欠点としてあげられる。また、調査者の力量や、調査した時の条件により、図面に精粗が出てしまう。だが、一方で考古学的な実測よりも短期間に安価にできる利点もある。こうした長所と欠点を考えた上で、縄張図を見ていただきたい。

本文目次

I. 佐土原町の城館の概観	1
II. 佐土原町の城館分布図と一覧	3
III. 佐土原町の城館解説	
1. 佐土原城	5
2. 内城	15
3. 那珂城	19
4. 内田城	23
5. 西ノ城	26
6. 福城寺	29
7. 古城 <small>ふるじょう</small>	31
8. 平田迫城	33
9. 新城	38
10. 南岳原城	39
11. 平城	40
12. 広瀬城	41
13. 囲	44
14. 古城 <small>こじょう</small>	46
15. 古館 <small>ふのたて</small>	48
16. 嶺ヶ城	49
IV. 佐土原城跡天守台に関する文書	
史料1 旧事集書 巻一	51
史料2 御家記 下巻	51
V. 佐土原町内の主要城館の航空写真と絵図	52

縄張図と現況図目次

佐土原町の城館全体分布図	3
第1図 佐土原城縄張図	13
第2図 内城縄張図	18
第3図 那珂城縄張図	22
第4図 内田城縄張図	25
第5図 西ノ城縄張図	28
第6図 福城寺縄張図	30
第7図 古城の小城縄張図	32
第8図 古城推定復元図	32
第9図 平田迫遺跡全体縄張図	35
第10図 平田迫遺跡調査区位置図及び遺構分布図	36
第11図 平田迫遺跡I区北見張台跡1縄張図	37
第12図 平田迫遺跡I区南見張台跡2縄張図	37
第13図 新城推定地現況図	38
第14図 南岳原城推定地現況図	39
第15図 平城推定地現況図	40
第16図 広瀬城推定地現況図	42
第17図 広瀬城推定復元図	43
第18図 広瀬城を現在の地形図に推定で載せた図	43
第19図 囲推定地現況図	45
第20図 古城推定地現況図	46
第21図 古城推定地見取図	47
第22図 古館推定地現況図	48
第23図 嶺ヶ城推定地現況図	50

写真目次

写真1 佐土原城（航空写真横方向）	裏表紙
写真2 内城（航空写真横方向）	52
写真3 那珂城（航空写真横方向）	53
写真4 内田城（航空写真横方向）	53
写真5 西ノ城（航空写真横方向）	54
写真6 福城寺（航空写真横方向）	54

絵図目次

絵図1 天正年中佐土原城下図	表紙
絵図2 明治三年廃城後図（佐土原廃城後図）	55
絵図3 日向国佐土原城	55
絵図4 慶長日向国絵図	56
絵図5 佐土原城下図	57

I 佐土原町の中・近世城館の概観

佐土原町は宮崎県のほぼ中央の海岸べりにある。またかつての宮崎郡の北部にあたる。東は日向灘に向かい、西は西都市・国富町、北は新富町、南は宮崎市に接している（平成17年12月宮崎市に合併予定）。町の中央部には標高七～八〇メートル程度の洪積台地（広瀬台地）が広がっている。町域の半分に近い面積の沖積低地は、北の二ツ瀬川とその支流の三財川と中央部に流れる石崎川に面していて、海岸近くに広がっている。この佐土原の地は交通の結節点であり、経済の要となっていた。高鍋とを結ぶ高鍋往還、鹿児島とを結ぶ薩摩往還、飩肥とを結ぶ飩肥往還、熊本とを結ぶ肥後往還、米良地方とを結ぶ米良往還である。また時代によって変わるが、海へも二ツ瀬川の河口にある徳ヶ淵港、福島港があり、盛んに使われた。まさに海陸の要衝であった。

町内には一六城の中・近世城郭が知られている。そのうち遺構の残る城は、佐土原城、福城寺（推定）、内城、内田城、古城（一部）、那珂城、西ノ城、平田迫城（一部）、囲の九城である。ただし、囲は地名と地形はあるものの城としては確認できなかった。残る七城の南岳原城、嶺ヶ城、平城、古城、新城、古館、広瀬城は破壊され遺構は確認できない。

それぞれの城の立地は、ほとんどが台地から派生する尾根の先端である。仲間原の台地の先端にあるのは、三財川に面して佐土原城、平田迫城がある。久峰の台地から派生する尾根上には、古城、福城寺がある。下村川に面した小台地の上には那珂城（諏訪城）、西ノ城がある。平野部にある城は、ほとんど遺構を失っている。明治の初めに築かれた広瀬城は石崎川の河口付近にあった。また古城、新城、平城、古館は、二ツ瀬川を臨んだ地にあったといわれるが確かではない。これらの城はほとんどが川沿いで、街道に面していた。規模の大小はあるが、いずれも地域の支配や流通の支配などを目的としていたと思われる。

次に歴史からこの城を見てみよう。鎌倉時代初期に伊東祐経（工藤祐経）が田島荘を領した。その息子の祐時の四男祐明が関東から下向して田島伊東氏の祖になった。祐明の居館はどこにあったか不明だが、それが古城もしくは古館という可能性もある。その後南北朝期の動乱期に山城の古城が取り立てられたのであろう。古城は山城なので、それに対応する居館が新城もしくは平城であろう。

南北朝期の初めに伊豆伊東氏の本家にあたる伊東祐持が、都於郡に下向し、勢力をふるい始めた。田島伊東氏も、時ははっきりしないが、都於郡の伊東氏との緊張関係の中で、より交通の便がよく山も広い佐土原城を築城し移ったと思われる。

室町時代の中期の文安六年（一四四九）ごろには佐土原城は、都於郡伊東氏（以降伊東氏とする）が田島伊東氏を破り、その持ち城となり、以降都於郡城と並び根幹の城となる。伊東氏は次築に勢力を拡大、永禄一一年（一五六八）ごろには伊東氏は、伊東四八城という主城と支城群を整備した。その中には那珂を治める城として那賀城が掲げられている。城主は郡司弥六左衛門尉とされる。この那賀城が現在の諏訪城（実は那珂城なので以後は那珂城とする）だと思われる。佐土原城の南方を守る城として位

II 佐土原町の城館分布図と一覧

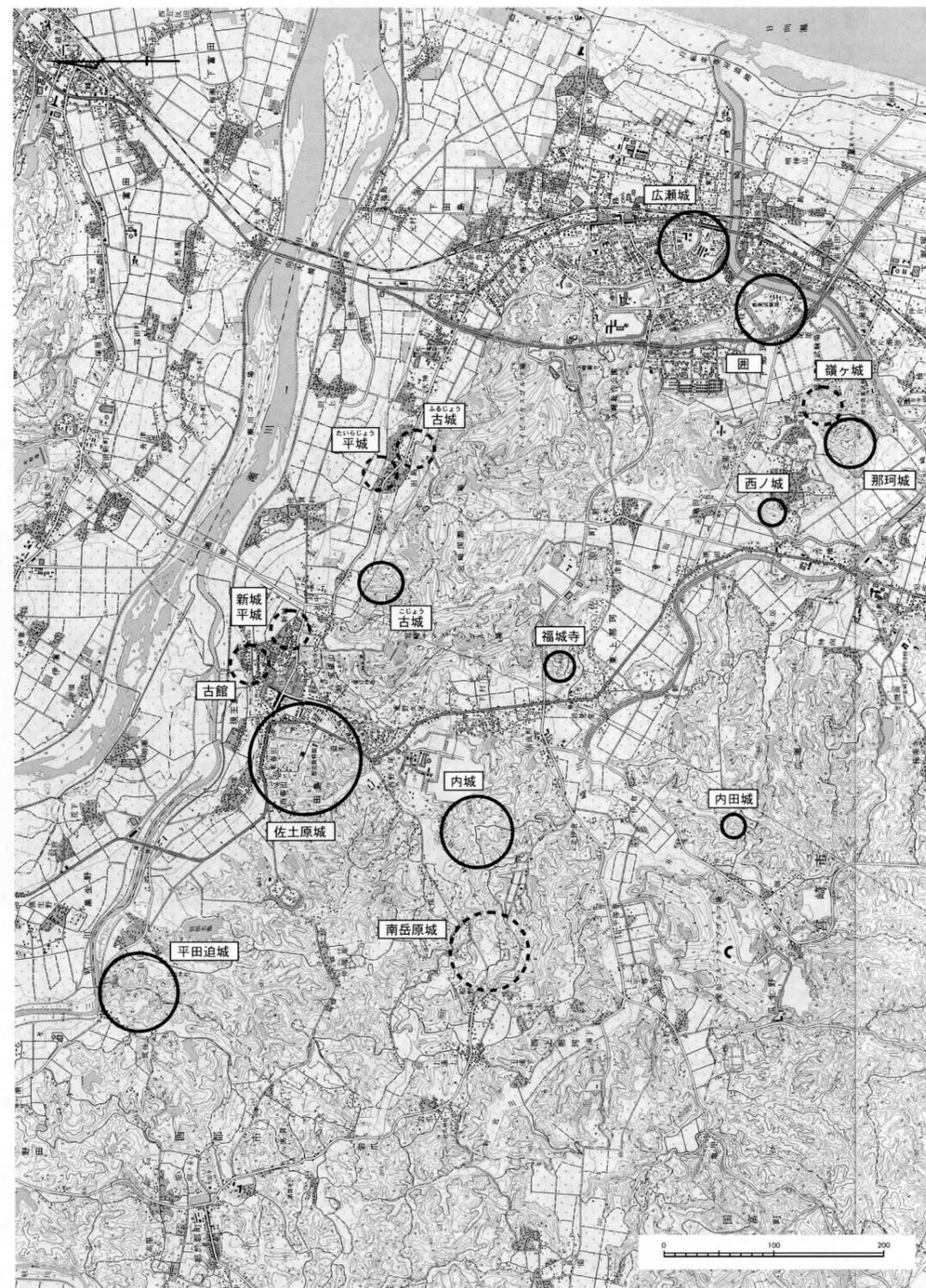
置つけられていたであろう。この那珂城の西北にある西ノ城は、この那珂城を補足する城であろう。

伊東氏の佐土原城をめぐる城には、この那珂城以外にもいくつかある。佐土原城と郡於郡城との連絡を確保するための城であると思われる内城と南岳原城、佐土原城と宮崎城の連絡を確保するための内田城、また推定であるが佐土原城と那珂城の連絡を見張る福城寺などがあげられる。

その後、天正五年（一五七七）伊東氏の没落とともに佐土原城は島津氏の日向支配の拠点となる。天正一五年、豊臣勢の来襲で佐土原城が包囲されるが、その折に築城した可能性が高いのが平田迫城である。郡於郡城と佐土原城の間の街道封鎖のための陣城であろう。

明治になり、佐土原城は不便であること、また人心の一新のためと称し藩主島津忠寛は、石崎川の河口近くの広瀬に新城の広瀬城を築城することにした。わずか一年余りで築城が完成しないうちに廃藩置県を迎えこの広瀬城は廃城となった。

以上のように、佐土原町内には、鎌倉時代の伊東氏の下向以来から戦国時代、江戸時代、明治初年までのバラエティーに富んだ城が存在したわけである。そのうち残念ながら遺構の失われた城も多いが、遺構の残った城も思いのほか多い。そのどれもが奇跡のように残ったわけであるが、文化財としての価値はもちろん、郷土を考えるうえでも、貴重な存在であり、極めて価値が高い。未来を担う子孫のためにも、また環境を保全するためにもこれらの城館を保存し、有効活用をしていくべきであろう。



佐土原町の城郭全体分布図

III 佐土原町の城館解説

城名	別称	所在地	遺構	現況	残存状況	調査歴	指定	特記事項
1. 佐土原城	鶴松城 田島之城	大字上田島 字追手	天守台、曲輪、 館跡、堀切、塹 堀、土塁、井 戸、柵形虎口	公園 横堀	良 好	一部発掘	国、県	破却された天守 台あり。島津氏の 御殿の推定復元 の鶴松館を建設
2. 内 城	なし	大字東上那珂 字内城	曲輪、堀切	畑地	一部破壊されるが 全般に良好	一部発掘		
3. 那珂城	なし	大字下那珂 字諏訪山	曲輪、堀切、 横堀、虎口	山林 一部畑地	良 好			諏訪城、中ノ 城、端ノ城の 曲輪名が残存
4. 内田城 (仮称)	なし	大字東上那珂 字内田	曲輪、堀切、 虎口、土塁	山林	良 好			
5. 西ノ城	金丸城	大字下那珂 字西ノ城	曲輪、堀切、 土塁、虎口	山林	一部土採りに より破壊され るが、後は良好			
6. 福城寺 (仮称)	なし	大字東上那珂 字福城寺	曲輪？ 土塁？ 堀切？	山林 神社	良 好			城かどうか 検討の余地 あり
7. 古 城	なし	大字下田島 字田島、字古城	曲輪、堀切	大部分が ゴルフ場	二つの曲輪 (天神、小城) のみ残存	一部発掘		五つの曲輪の うち、二つの曲 輪を残すのみ
8. 平田迫城 (仮称)	なし	大字上田島 字平田迫	曲輪、堀切、 旧道の堀切	高速道路 山林	中央部を 高速道路で 破壊	破壊部分 発掘		高速道路を はずれた部分 のみ残存
9. 新 城	なし	大字上田島 字新城町	なし	宅地	明確な場所は不明			平城と同一の 可能性あり
10. 南岳原城	こじょう 古城	西上那珂 字南学原	なし	畑地	全破壊か？			内城と誤認の 可能性あり
11. 平 城	なし	大字上田島 字平城	なし	宅地	明確な場所は不明			新城と同一の 可能性あり
12. 広瀬城	なし	大字下田島 字袋	なし	宅地 神社	地形のみ残る			堀跡が 道路となって 残る
13. 囲	なし	大字下那珂 字囲	川跡の堀？	農業 試験場	地形のみ残る			城でない 可能性あり
14. 古 城	なし	大字下田島 字田島	なし	一部公園	明確な場所は不明			曾我殿の墓が ある
15. 古 館	なし	大字上田島 字古ノ館	なし	宅地	明確な場所は不明			地名の 聞き取りに より発見
16. 嶺ヶ城	なし	大字下那珂 周辺	なし	山林	土採りに より破壊か 明確な場所は不明			那珂城の北に あったらしい

1 佐土原城 (さどわらじょう)

〈別 称〉

鶴松城、田島之城

〈所在地〉

大字上田島字追手

〈構 造〉

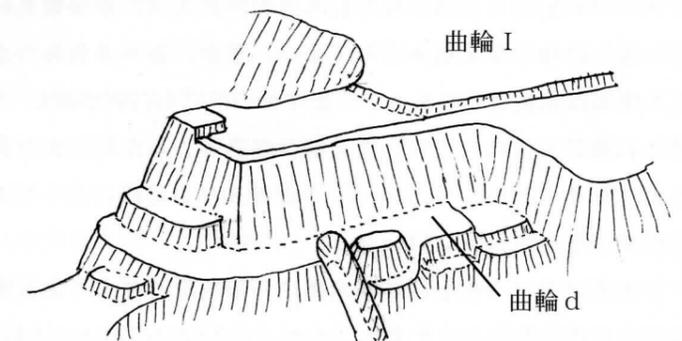
佐土原城は、宮崎平野を東西に流れる大河の一つである一ツ瀬川、そしてそこに流れ込む三財川の合流点の近くに突き出した小高い山に築城している。一ツ瀬川は大河で、宮崎平野の北部の流通の大動脈である。また三財川も中規模な河川であるが、

伊東氏の本拠の都於郡城の脇を通り物資の運搬にも都合がいい。佐土原城はこの両河川を抑える目的と、日向各地から宮崎への陸上交通の結節点の役割もあり、経済上極めて重要な地に築城された。



佐土原城跡 曲輪 I (本丸) 柵形虎口 a

人工で平坦にしたもの^{こくち}の配置や城の虎口(城の出入り口)、ルートなど現状の遺構と合い極めて信頼性が高い。従って、この古絵図を現状と比べれば、既に失われた所も復元できるし、またルートがどのように通っていたかを考えることができる。そこで適時この古絵図(表紙を参照)を使いながら、^{なわばり}縄張(城の築城プラン)を解明していきたい。



A図 曲輪 d (逆心曲輪) 鳥瞰図

佐土原城は大きく見るとちょうど馬蹄形の山となっている。この馬蹄形の要の山に築城し、その麓の馬蹄形の山に囲まれた地を居館としている。

まず山城部分であるが、その前にこの佐土原城に関しては、「天正年中佐土原城下図」(以下古絵図とする)と称する古絵図がある^{注1}。この古絵図は天正年中の佐土原城を描いたものとされるが、実際は江戸期の慶長年間以降の姿を描いた可能性が高い。この古絵図は^{くるわ}曲輪(城を構成する区画で、

山頂の曲輪^{くるわ}Iは、標高七二メートルあり、もっとも高い。ここが本丸にあたる。山頂の平場はかなり広いので、堀を入れ三つに分割されている。南より曲輪I、II、IIIとする。曲輪Iの虎口aは、下から上がってくるメインルートのおが曲輪の間をぬって最後に到達するところである。虎口aは小さな枳形虎口（城の出入口をクランクさせ防備を強化したもの）であり、古絵図でも枳形虎口にして城門を二つ描いている。この曲輪Iは山頂の曲輪の中では一番広い。西南の方向は尾根続きにあたるが、かなり落差があるためか、堀切をつくっていない。曲輪側はこの尾根続きの断崖に面して櫓台をつくり防御を固めている。尾根続きに下りてみると、帯曲輪（細長い帯のようになった曲輪）があり、その側面におもしろい遺構がある。それが曲輪dで、塹堀（山腹に縦に入れた堀で敵の横移動を防ぐ）cと櫓台で独立した曲輪にしてある（A図）。これは万が一尾根続きに敵が進出してきた場合、ここから出撃して敵を横合いから攻撃するためである。また、この曲輪は行き止まりなので、敵が苦勞して占領しても、城内に入られることはない。その上、城内側から攻撃にさらされるため、この地を確保しておくことが難しい。尾根続きは山城の一番の弱点になるので、

わざわざこの仕掛をしたのであろう。このような遺構を逆心曲輪^{注2}と軍学（江戸時代の軍事技術を教える学問）では呼んでいる。このあたりは古絵図には描かれていない。

曲輪IIは、本来曲輪Iと一体の曲輪であったが、広いために中央で堀切で分割して別の曲輪としている。この曲輪IIの北に長方形の壇があり、ここが天守跡と伝承されていた。近年この伝承地の発掘が行われ、長方形の天守台の跡が発掘された。南北約一二メートル、東西約一三メートルを計る。



天守台

天守台eは破却されていて、石垣も数段程度しか残っていない。そして破却した天守台の上を小石で埋めていた。石垣は崩されているので本来の高さはわからないが、全体の感じからするとそれほどの高さはないように思われる。石垣の石は割り石で矢穴（石を割るための楔を打ち込むための穴）が多数あいている。隅角部はあまり残っていないが、互い違いに積む算木積みとみてよい。また、瓦も多数みつかっていて、その中には金箔をほどこした鯨瓦や桃実紋鬼瓦などもあった。天守台の中にも石列があり、ちょうど柵のようになっているようである。低い石蔵のようになっていた可能性がある。しかし、まだ発掘は四分の一以下なので、これからどういう形になるかはわからない。天守台の入り口は西のようであり、中央部に入り口らしき礎石がある。玄関があったかもしれない。

この天守台は、佐土原城が全体に石垣を全く使っておらず土造りの城であることを考えると、極めて異例の存在であるといえよう。また、天守台としては日本最南端の存在であり、その意味でも興味深い。築造年代は、『旧事集書』の伝承では、慶長一七年（一六一二）という。これについては、後の歴史の

項目で詳しく述べたい。

さて、この天守台のある曲輪は、「殿主丸」という伝承名があったという記録もある。殿主は天守と同じ意なので、当時はそう呼ばれていたであろう。この曲輪IIから尾根は、なお北へ伸びていくので、曲輪III、IVと連ねていき、最後に弁天山の尾根とぶつかる。このぶつかった所に虎口pをつくり、ここをいわゆる搦め手（裏口）としている。この虎口から本丸へ向かうルートがあるが、古絵図にはかかれていない。だが、曲輪が連続しているのを考えると、当時から存続した道であろう。



佐土原城 登城路ルートo

曲輪I、IIなどがある鶴松山が、この城の中核部であるが、この山から東北に伸びる尾根がある。ここに下りるには本丸の下の曲輪の枳形虎口fから虎口gを抜けていく。ここは連続虎口になっており、テクニカルなルート設定である。そして曲輪IXの脇を抜け、先端の曲輪Xの手前の虎口hで谷に下りていく。虎口hには、古絵図には城門が描かれているが、この虎口の壁面の西側の岩盤にほぞ穴らしき物がうががたれている。もしかしたら、これが城門に使ったほぞ穴かもしれない。曲輪Xの先は尾根が二つに分かれるが、そのどちらにも、堀切を入れて尾根先からの敵の侵入を防いでいる。

続いて、中核部の曲輪Iから、西南に向かうルートがある。このルートこそメインルートであり、いわゆる大手道のおである。曲輪Iから枳形虎口aを抜け、ジグザグに下りると、すぐ土橋状の道iに出る。この両側から谷が迫っており、天然の土橋となっている。もちろん築城時に両側からある程度削った可能性はある。両側の谷は、それぞれ家臣の屋敷地になっていたようで、「佐土原城下図」（以下城下図とする）によれば、東の谷には「田代作右エ門」以下四つの区画に分かれている。西の谷はしっかりした造成で二段あり、瓦片が今でも散乱している。中段には土塁もあり、大身の屋敷があったようである。城下図によれば「長友九郎左エ門」の屋敷となっている。ここの土塁あたりに、古絵図では二階櫓門が描かれている。城下図にも城門が描かれているところを見ると、城下から城内に入りやすい場所なので、山城の存続期から廃城後まで、何らかの城門があったのであろう。ただし、古絵図の二階櫓門はできすぎなのでフィクションの可能性もある。kの城門を抜けると谷に出る。ここには城下図には「水之手池」と描かれている。現在も湿地帯であり、池がかつてあったことをうかがわせる。池の名からすると、ここが水の手であったのであろう。古絵図では、この池は描かれていないが、南に続く水堀として描かれている。水が湧く谷で湿地帯となっているので、水堀として描いたのであろう。

もとにもどり、土橋状の道iからルートはなお東へ行く。曲輪VIの下を抜け尾根の上を谷状にしたルートを下っていく。このルートoはやがて両側から土塁状に挟まれた道となる。このルートは大手道として最重要の道なので、防衛的にも強い堀状にしたのであろう。もし、このルートを敵が進撃しても、常に上からの攻撃にさらされ立往生してしまうようになっているのである。このルートは、下の平地に

下りると、大手の水堀の脇に出ていく。なお、途中の曲輪VIは、このルートを防御するための曲輪であり、ルートを上から抑えていて、敵がこの脇を通り抜けるのは、道幅も狭くまた谷に面していることもあり、至難の業と思われる。

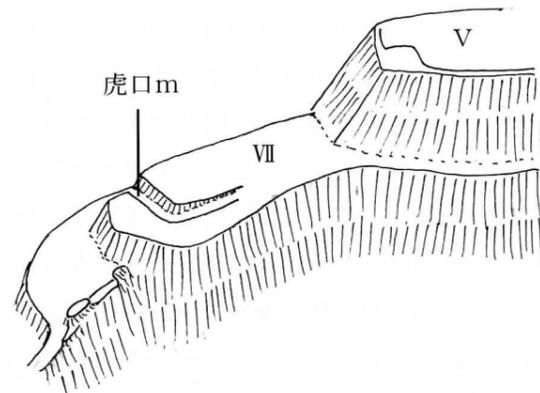
またもとにもどり、土橋状の道iの南にそびえているのが、曲輪Vで伝承名南ノ城（南丸とも）である。この曲輪に入るには、土橋状の道iから西南の坂を登っていくのだが、道は三ヶ所に分岐している。後世の破壊道があるため、その中では虎口jとしたところが、屈折して登り、最後に柵形虎口になるなど城のルートとしてふさわしいので、ここを虎口と推定した。古絵図でもこの位置にルートが描かれているので間違いはないだろう。

曲輪Vはほぼ長方形をしており、北面と西に帯曲輪がめぐっている。曲輪内には東から南、西と「コ」の字形に土塁がある。この佐土原城全体に土塁のある曲輪は少ないことからいっても、この曲輪Vがいかに重要であるかがわかる。また西南の角には、櫓台があり、南に延びる尾根を抑えている。

この曲輪Vの重要性はその位置にある。メインルートである道oが、この曲輪の下への堀切kを抜け本丸の曲輪Iへ向かっている。また、西の麓の現在の佐土原中学のあたりから曲輪VIIIの下を抜けるルートの道nが、この曲輪Vの直下を抜けてメインルートの道nと合流する。以上の道n、oが曲輪Vの下を抜けなければならないのである。そのため、この曲輪Vは佐土原城の南半分の防御の要となっているのがわかる。また、土橋状の道iの下谷は、ルートとなっているため、曲輪Vの西の角から大きな竪堀lを入れている。

曲輪Vの南に延びる尾根にはいくつかの曲輪がある。直下の曲輪VIIは、先程述べた曲輪Vの西南の櫓台から曲輪内を全て抑えられている。この曲輪を通過して曲輪Iの本丸方面に向かうのは、極めて困難であろう。曲輪VIIから下の曲輪へ行くには、逆の「L」の字に折れた虎口mを抜けていく（B図）。長い柵形虎口と評価してよい。下の曲輪を通り先端の曲輪VIIIの手前で麓の曲輪へ下りていく曲輪VIIIは伝承名を松尾丸という。松尾丸の松尾は、末端の尾根を意味し、南九州の城ではよく使われる曲輪名である。曲輪は二段に分かれ、台形の上の曲輪とそれを取り巻く「L」字形の帯曲輪とに分かれる。南方向に対する最初に防御する曲輪として位置づけられたであろう。

以上のように佐土原城の山全体に城郭遺構があるが、先ほど述べた搦め手口にあたる虎口pの東の弁天山も城として使っていた。ただし、人工的な壁（曲輪の側面を人工的に削って敵があがれないようにしたもの、切岸ともいう）はほとんど造っていない。山頂のqは削平して曲輪にしているのと西南の中腹に帯曲輪を造っているばかりである。また堀切も南の尾根の下の方に小さな堀切rがあるが、これ以外にはつくっていない。全体に自然地形を生かし、大きな土塁として考えていたと思われる。古絵図にも曲輪は描かれずに、松を描き自然の山として表現している。しかし、この弁天山も東方の城壁ラインで



B図 曲輪VIIとその下の曲輪鳥瞰図

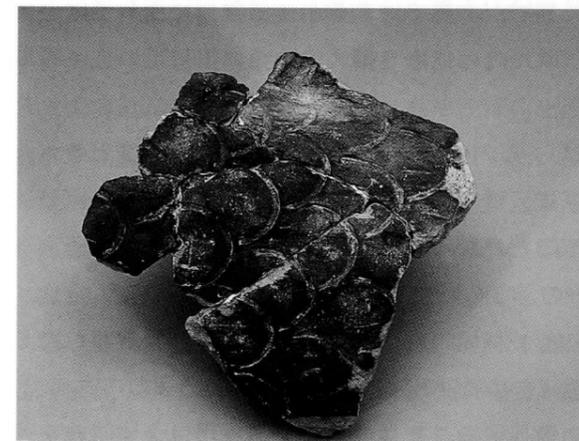
あるので城の不可欠の一部として考えなければならないだろう。

佐土原城の鶴松山として弁天山に囲まれた中が、現在の鶴松館のある地である。ここの東の方面は鶴松山から尾根と弁天山の尾根が一〇〇メートルほど開いている。この尾根の間に大きな水堀（内堀）をつくり、ここを大手とした。内部は居館地としては、広さもかなりあり、しかも山に囲まれているため、最適の地であった。伊東氏時代から居館地として使われていたと思われるが、江戸期の島津氏時代の遺構は確認できたものの、中世の伊東氏時代の遺構は発掘によってもはっきりとはしなかった。この水堀の所にあった城門は、佐土原城に入る最も重要な城門であるので、いわゆる大手門があったろう。古絵図には立派な二階櫓門が描かれている。

内堀の外にも、外堀sが城山の北に延びる尾根の先から始まり、弁天山を大きく囲み大手口の東をクランクして回り、曲輪VIIIの松尾丸の尾根まで続く。この外堀は現在も水路として利用されていて、弁天山の北の裾野あたりはよく残っている。この水堀に囲まれた曲輪は城下図によれば一族衆と重臣達の屋敷地であった。この曲輪はいわゆる二の丸にあたる。さて、この総構と思われる外堀には三つの虎口があった。北が鳴之口、東が追手口でここが正面である。またもう一つ松尾丸の下に野久尾口があった（後に十文字口を追加し四つとなった）。

このように多くの遺構が山中に存在するが、時代的にはどう考えればいいのか。今のところ、伊東氏、島津氏の築城法が不明なので、どの遺構がだれの築いたかはわからない。しかし、概ね、佐土原城の骨格は伊東氏がつくり、細かい柵形虎口などは島津氏がつくったのであろうと想像する以外はないのである。

以上、佐土原城を概観した。山城部分はいたる所で防御の工夫がほどこされている。城のどのルートも巧みに上の曲輪から抑えられていたり、柵形虎口も効果的に使われていることからすると、縄張のすぐれた城として総括できる。また列島内最南端と思われる天守台もあったことなどを考えると、全国的にも極めて貴重な城というべきであろう。



金箔鯨瓦



桃実紋鬼瓦

注

- 『天正年中佐土原城下図』は、日南市所蔵の図を初めとして、佐土原町の日高次吉家旧蔵図など数点ある。「天正年中」というタイトルなので、伊東氏の時代の図として伝承されてきた。そのため江戸期の伊東氏の飢肥（日南市）に伝えられてきた。しかし、この古絵図の作成された意図、時代は未だ不明で、これからの課題といえよう。
- 逆心曲輪については拙稿「戦国末期に現れる防御専用の小曲輪」(『中世城郭研究』創刊号 中世城郭研究会 一九八七)を参照のこと。
- 『旧事集書』(『日向郷土史料書』第一巻)日向郷土資料集刊行会 昭和三六年
- 「佐土原城に就て」鬼塚重彦(『日向』佐土原・妻・西都原号 第十六・十七合輯 日向郷土会 昭和一三年)。
- 「佐土原城下図」の来歴は不明である。現在見られる図は近年の写しであるが、図には家臣の屋敷地に誰が住んでいたかを詳しく書き入れている。幕末の成立であろう。本書の57ページに掲載している。なお、『佐土原町史』(佐土原町昭和五七年)の見返しにも掲載されている。

〈歴史〉

佐土原城の創築の時期は不明である。『日向地誌』では、鎌倉時代に、伊東祐時の第四子祐明が田島に下向して田島殿といわれた頃に創築か、としている。佐土原城は山城で鎌倉期に築城するような城ではないので、これは全くの伝説であろう。田島(伊東)氏の初期居館はどこであったかはわからないが、ふるじょう ふのたて古城、古館などの平地もしくは低い山の居館にいたであろう。南北朝の動乱期には山城のこじょう古城にいたと思われる。その後、年代不明ながら田島氏は佐土原城を創築し移転したが、その城域は現在より狭いと思われるので、小さく独立できる南の城を中心にしていた可能性もある。

一方、都於郡城の伊東氏は次第に勢力を広げていた。そして五代伊東祐堯の頃に田島氏を亡ぼし、佐土原を治めた。佐土原には祐堯の弟祐賀が佐土原氏を名のり、佐土原城に入ったといわれるが、確かな証拠はない。

文明一二年(一四八〇)、六代伊東祐国は佐土原を知行したといわれる。祐国は文明一六年に飢肥攻めの軍を起こしたが、佐土原は都於郡に次いで列記されている。既にこの時期に佐土原城は、都於郡城を補完する重要な地位にあったと思われる。それは都於郡城が本拠ではあるが、三財川に面してはいても、内陸に入りすぎている弱点があった。一ツ瀬川と三財川の合流点を抑えていて、海に近い佐土原城は、その弱点を補う絶好の城であったからであろう。

天文の初頭(一五三二～)になると、伊東氏の相続をめぐる内部抗争が続くが、ようやく天文五年(一五三六)伊東祐清(後の義祐)が家督を継承し佐土原城に入城することになった。天文六年佐土原城は失火で燃え、義祐は宮崎城に移り、佐土原城は修復することになる。佐土原城に義祐が戻るのは天文一年ごろとされる。佐土原城は具体的な記録はないものの、この時にかなり整備されたであろう。

伊東義祐は天文二三年(一五五五)に、佐土原城から都於郡城に移り住み、国中の侍より祝われたことが『日向記』に見える。しかし義祐はその後も佐土原城を都於郡城と一緒に使っていたようである。

永禄一一年(一五六八)伊東氏の悲願だった飢肥城を確保することに成功し、伊東氏は全盛時代を迎

える。この頃伊東氏の本城の都於郡城には、義祐の息子の伊東義益、佐土原城には義祐、飢肥城にはやはり息子の祐兵を置いた。佐土原城は義祐の隠居所としての位置づけであったが、その実は伊東氏の権威を表す都於郡城、佐土原城、飢肥城は流通と経済の要として考えられていた。しかし、それも永禄一二年に義益が突然死亡し暗雲がたちこめることとなる。

元龜三年(一五七二)伊東氏は島津氏と木崎原で合戦し、大敗する。この時、『日向記』によれば、都於郡、佐土原の「若き衆」を多数失ってしまった。そのため伊東氏も退勢に向かっていく。

天正四年(一五七六)祐兵は飢肥城より佐土原城に移り、死んだ義益の娘と結婚し体制を固めようとした。しかし翌天正五年島津氏が紙屋から侵入し、伊東氏は総崩れになってしまう。義祐とその一族は佐土原城を支えきれずとみて、城から出て豊後へ逃げてしまう。島津軍は日向を占領し、佐土原城にとりあえず伊集院忠棟が入城する。

敗北した伊東氏は豊後大友氏を頼って、機会をうかがった。天正五年大友・伊東の連合軍が日向奪還を目指して侵入。都於郡、佐土原周辺に伊東軍が進出し激しい闘いが繰り広げられた。一方、大友軍は高城(木城町)を包囲していた。島津軍も反撃するために島津義久が、薩摩より出陣し佐土原城に入る。義久は大友軍と耳川で闘い大勝利を得、日向は完全に島津氏の手に入ることとなった。

島津氏の日向支配は、一族の島津家久を佐土原城に入れ日向守護代とし、それを補佐する実務責任者として老中の上井覚兼を宮崎城に置いた。

島津氏はその勢いをもとに北九州制圧に乗り出したが、豊後で豊臣氏に敗北、日向に引き上げた。佐土原城は豊臣氏に包囲され、遂に降服することになった。その時島津家久は居城を出て、上洛することを了承したため、佐土原城とその城領を安堵された。豊臣軍の大将豊臣秀長は佐土原城に入城し、滞りして仕置を行ったことが記録に見える。

天正一六年(一五八八)豊臣氏による九州の国分けが行われ、佐土原は急死した家久の子豊久に宛注1わられた。豊久の知行は「都於郡院佐土原庄」で二万八千石あまりであった。

慶長五年(一六〇〇)関ヶ原合戦が起こり、再び佐土原城周辺で戦いが始まる。まず伊東氏の家臣の清武城主稲津掃部助が、高橋元種の宮崎城を落とした。そのため、佐土原城は島津領の防備の最前線となってしまった。宮崎城の伊東軍と佐土原城の島津軍の間で度々激しい戦いが行われたが、島津氏や秋月氏、高橋氏が徳川家康に降服したため、和議が整い戦いは納まった。

慶長六年の徳川家康の知行割りが行われた。佐土原の地は没収され、家康の代官山口直友の与力庄田三大夫安信が代官として入った。島津氏は佐土原の地を確保するために、戦死した豊久に代わり、大隅垂水の城主島津以久を佐土原城の城番とした。以久は山口直友と交渉し、慶長八年にようやく佐土原の地は、以久に安堵された。以久は佐土原城に入ると、城内各所を見て回り、直接指揮して、城を大改修したといわれる。この後は、以久の系統が代々佐土原領を継承していく。

慶長一五年(一六一〇)、島津以久は伏見で急逝した。その後継ぎをめぐる垂水を継いだ以久の嫡孫久信と年少の息子忠興の間で争いが起こった。忠興はわずか一二歳であったが、老臣樺山久成が支持し、結局家督を継ぐことになった。家督争いを征した忠興は(実質は樺山久成)、垂水に備えるためと称して、慶長一六年佐土原城の修補を開始する。修補の理由は垂水の脅威よりも、代替わりを確実にするた

めと人心を一新するためであろうが、はっきりとはわからない。その修補の内容は天守を立て、櫓・塀・門を造ったという。天守は『旧事集書』によれば二重であった。古絵図には三重の天守が描かれており、いずれが正しいかわからない。古絵図は建物の誇張が目立つので、二重の方が天守台の大きさからすると可能性があるかもしれない。この時の修補は、ほとんどが作事（建物を建てること）中心で行われたと思われる。土木を中心とした普請でないので、防備を強化するというよりは、藩主の権威を強めることに狙いがあったのであろう。

さて発掘された天守台は、記録通り慶長一六年の築造としてよいのであろうか。天守台をよく見ると、石材は矢穴で割っていること、隅角部は算木積みであることなどは、慶長の中頃としてよい。一方、金箔瓦などは天正から文禄期に豊臣大名に規制されて使われることが多い。しかし、慶長の中頃には規制がゆるやかになり勝手に使用したとしてもおかしくはない。以上のことからすると、天守台は慶長一六年築造としても矛盾はないので、記録が正しいと考えて間違いはないだろう。

このように、外見も立派になった佐土原城であったが、寛永二年（一六二五）藩主忠興は、広大な山城の維持管理に苦慮したため、山上の天守以下櫓、城門を全て取り壊し、山の下への丸に藩庁を移した。これはもちろん維持管理に苦慮したのは事実であろうが、元和偃武による平和の持続により、山城の意義が薄れたことによるとと思われる。山下の城には、御殿、書院、数寄屋などが立ち並んでいた。周囲には、代官所、普請所などや重臣の屋敷があった。その後江戸時代を通じて山下の城が使われたが、山城部分も建物こそ無いものの、万が一の事能のために維持管理されたと思われる。

明治二年（1869）藩主忠寛は、佐土原城を廃して、人心一新とより交通に便利な地広瀬に新城を築くことを決定し、佐土原城の長い歴史は幕を閉じた。

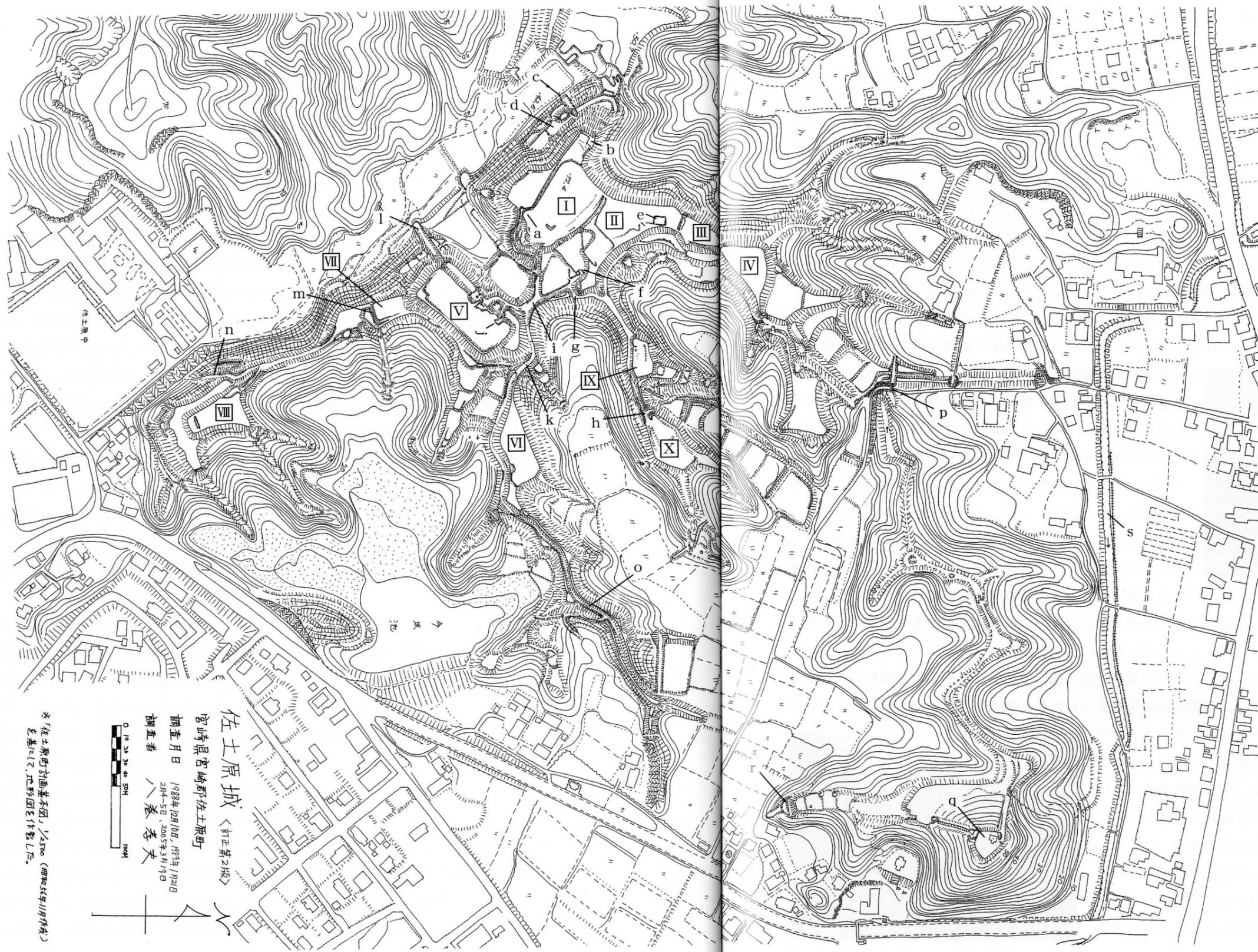
注

1. 『日本歴史地名大系 第四六巻 宮崎県の地名』 平凡社 一九九八年

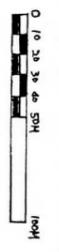
〈文献〉

- 『日向記』（『宮崎県史叢書』）宮崎県 平成十一年
『旧事集書』（『日向郷土史料集』第一巻）日向郷土史料刊行会 昭和三六年
『日向地誌』平部嶺南 歴史図書社 昭和五一年復刻
『宮崎県史 通史編 近世下』宮崎県平成一二年
『日本歴史地名大系 第四六巻 宮崎県の地名』 平凡社 一九九八年
『佐土原町史』佐土原町 昭和五七年
『佐土原藩史』佐土原町教育委員会 平成九年
『日本城郭大集』第一六巻 新人物往来社 昭和五五年
『佐土原城址概要報告書Ⅰ』佐土原町 一九九一年
『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書』Ⅰ、Ⅱ 宮崎県教育委員会 一九九八年
「佐土原城に就て」鬼塚重彦（『日向』第一六・一七合併号）昭和一三年
『日本歴史地名大系第四六巻 宮崎県の地名』 平凡社 一九九七年

※以下の項では、文献の詳細は一回目のみに掲載することとする



※「佐土原町計画基本図」1/2500 (昭和54年11月作成)
 基図は「地形図」を複製した。



佐土原城 <訂正第2版>
 宮崎県宮崎郡佐土原町
 調査月日 1988年12月10日, 1989年1月20日
 2月4-5日, 2005年3月19日
 調査者 八巻孝夫

第1図 佐土原城縄張図

2 内城 (うちしろ)

〈別称〉

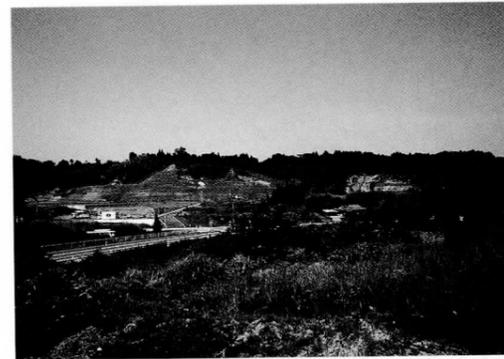
なし

〈所在地〉

大字東上那珂字内城

〈構造〉

内城は佐土原城の北約一キロメートル少し越える所にある。標高約八〇メートルの広大な台地で、台地の上は平坦であるが、台地の周囲の斜面はかなりきつく絶好の要害となっている。城の北の直下に下村川が流れていて、大きく蛇行しながら石崎川



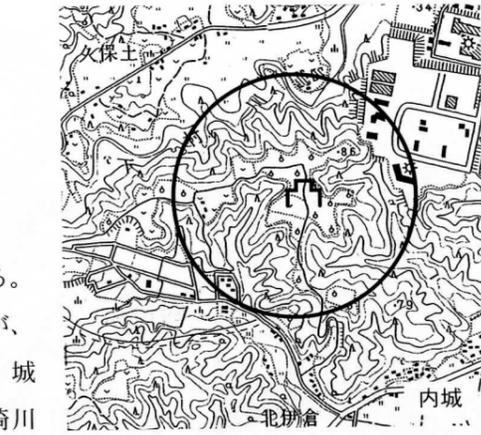
内城の全景

に流れ込んでいる。城からの見晴らしは良く、北は佐土原城から西野久尾を通り久保土、船野を経て都

於郡へ行く道を眼下におさめる。東は佐土原城から東野久尾を通り下村から那珂城（現在の諏訪城）へ行く道も見ることができる。しかし、南と西はほぼ同じ高さの山が続くため、見晴らしは悪くなる。この城の眺望からすれば、もっぱら北の方向の監視が大きな築城の目的であると考えられる。

さて、内城の縄張を見よう。内城は大きな台地を三本の堀切で分割し、四つの曲輪としている。中央部の大きな台地は、ほぼ真ん中の台地がせばまった所を堀切 a で切

断し、曲輪 I と II にしている。また曲輪 I が東西に長くなるので、西は堀切 b で、東は堀切 c でそれぞれ切断し、曲輪 III と IV にしている。曲輪 I はかなり広く南北で約一五〇メートルに、東西で約二三〇メートルもある。曲輪から突出する尾根は、堀切 d、e、f と必ず切断し、尾根から来る敵を入れないようにしている。曲輪は耕作の結果もあり、ほぼ平坦であるが、西南の方向に段がある。l のあたりは、堅堀状になっており、谷から上がる道となっているが、往時の虎口ではないだろう。現在曲輪内には土塁はないが、かつては、堀切 a に面して曲輪 I の方に土塁があったといわれる。崩して埋めたといわれるが、その時に堀切の東半分が埋められたらしい。この土塁があることにより、曲輪 I は II よりも優位の曲輪となるので、いわゆる本丸は曲輪 I となる。この城の伝承名の内城は、この曲輪の名称であった可能性が強い。



内城の堀切 a 中央の木のところ

曲輪 II は曲輪 I よりも面積は大きい。南北約一八〇メートル、東西約三二〇メートルを計る。この曲輪 II もほとんど耕地となり、平坦である。所々に段差はあるが、区画として生きるかどうかはわからない。曲輪 II の台地からの尾根の突出部はあるが、曲輪 I と違いそれぞれに堀切はない。わずかに西南に延びる尾根にかなり小さな堀切があるが、曲輪 I の堀切と違い台地縁になく約三〇メートルほど下ったところにあり、堀切ではない可能性もある。こうしたことからすると、曲輪 II は、曲輪 I と違い天険に頼り、人工の防御をしていない、つまり敵をあまり警戒していない異例の曲輪ということになる。なお、曲輪 II の南になお台地は続くが、曲輪と同じような平坦面がある。しかし、そこから延びる尾根に堀切など防御施設はないので、城ではないと考えられる。

曲輪 III は、曲輪 I の三分の一ほどの広さである。堀切 b に面して方形の段があり、何か建物があった可能性がある。尾根は西の方に延びていくため、堀切 g を入れる。堀切 g の堀底は堀切 a や b と違い段差などがある。特に中央やや東よりには、橋を架ける橋脚の台と思われるものがある。ここが外から曲輪 III へ入る虎口の可能性がある。この曲輪 III は曲輪 I と同じように突出部には堀切 h、そして平場 i を作り、尾根からの敵に備えている。

曲輪 IV は、堀切 c によってつくられた曲輪であるが、既にバイパスのために削られてしまっている。幸い発掘報告書の実測図があるので、それによって縄張図に入れたものである。斜めに入る線の東が失われた遺構である。この曲輪から東に二つの突出部があるが、それぞれに堀切 j と k を入れ敵の侵入を防いでいる。注目すべきは堀切 j の所で、堅堀状の道があり、虎口と認められたことである。ほぼ真つ直ぐ上がり、あまり虎口としての工夫はない。

以上の遺構の説明でわかるように、直線的な堀切で台地上を大柄に分割している。また曲輪 I、III、IV と北面する曲輪のみに尾根からの突出部に堀切を入れている。このことからどんなことが考えられるであろうか。

一つは内城の曲輪から北へ向かう尾根に、かなり堀切を入れていることである。曲輪 II の南へ向かう尾根には、ほとんど堀切を入れないのと極めて対照的である。このことから、この内城は北の方向を敵が来る方向と考えているのがわかる。北には先ほど述べたように、佐土原城と都於郡城を結ぶ街道がある。この城はこの街道の監視と制圧が主たる目的なのであろう。

二つ目に大柄な曲輪取りの意味である。一般に大柄な曲輪は、兵站基地として使う場合が多い。つまり、多数の兵員の収容、物資の収納に便利だからである。この内城の場合は、これからの二つの狙いがあった可能性がある。

〈歴史〉

内城の歴史は全くわからない。内城という城名も中心の曲輪名が伝承されただけで、当時の名称は残らない。『日向地誌』には、遺構の残らない（当時は残っていたにしても）尾根続きの南岳原城を掲げ、内城に関しては一切掲げない。現在の内城の明瞭な堀切を見るとこれは不可解なことである。そこで推測をたくましくすると『日向地誌』の作者平部峽南の勘違いということとは考えられないだろうか。というのは、東上那珂村の北に「古城」（南岳原城は「古城」と言う）と『日向地誌』にある）と呼ばれる城

があること知り、小字名を城名にしようとして、間違えて尾根続きの隣の小字名を聞き城名にしてしまったというふうなのである。尾根続きの近接したところに二つの城があるのはおかしいことではないにしても、地元の現在の伝承では内城の名称の伝承は残っているが、南岳原城に関しては全く伝承は残っていないし、小字名にも「城」に関する地名は使われていない。以上は推論であるが、このことに関しては、より精緻な聞き取りにより、わかる可能性があるだろう。

さて、内城ではバイパスの建設することで、一部を発掘している。その報告書によれば遺物はほとんど出土しないが、わずかな陶磁器片は、一五～一六世紀の時代幅に収まるものとする。このことだけではこの城の年代はわからないとする以外はない。それでは、他に手がかりはあるであろうか。この内城は佐土原城と都於郡城の街道を守る役割があること、そして佐土原城に南に約一キロメートルと近い。このことから、内城の目的としては佐土原城と都於郡城の連絡路の確保以外にも、佐土原城をめがけて南から来る敵（島津軍であろう）を佐土原城と共同して挟撃したりする役割が期待されていたように思える。そうだとすればこの内城は、伊東氏が島津氏の直接的な脅威を感じたところに築城されたと考えられることができる。この内城の縄張が北に偏重して堀切をつくっているのは、この城の目的に忠実だからであろう。その意味で、内城の南半分の曲輪Ⅱは先述したように城域としてとらえたが、積極的な防御策は何もしていない。単に天険を頼んでいるだけである。それゆえ城が大きくなりすぎるので南半分は城として使わなかったとも理解できる。その一方で、こうも考えられないだろうか。北半分の本格的な城郭部分は武士の立てこもるところ、そして南半分は農民たちの収容場所として予定されていたとするのである。島津氏との抗争は、農民たちをも巻き込み激化していった。そして島津氏はその後の北九州の攻略戦でも農民たちをとらえる人取りを行うので有名であった。それに対応しこの周辺の伊倉、岩見堂などの農民たちの逃げ込み所として機能していたのではないか。そのように考えないと、この異常な縄張は理解できないように思える。

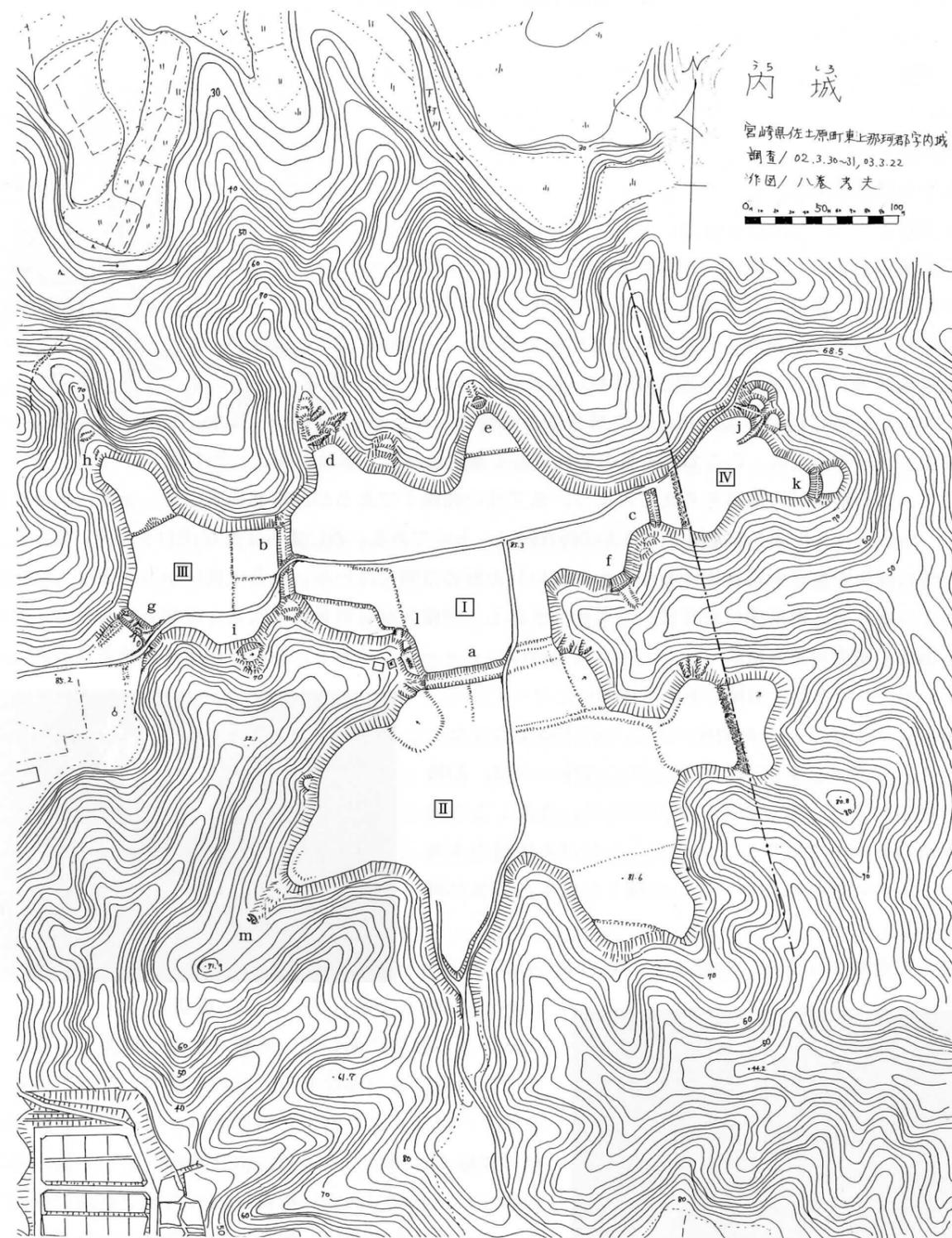
なお、内城の北の麓にある集落の久保土に、明治三年（一八七〇）まで城山寺という名の寺があった。この寺の名の城山は、この内城のことをいっている可能性もある。とすると、この内城は城山、そして、先ほどの推定が正しいとすると古城とも呼ばれていたのかもしれない。

〈文献〉

『宮崎県中近世城館緊急調査報告書』Ⅰ、Ⅱ

注

1. 人取りとは戦争時に敵地の農民などを捕らえて自国へ連れ去ること。人が財産なので、売ったり、奴隷とした。特に島津氏の人取りは有名。詳しくは『雑兵たちの戦場』（藤木久志 朝日新聞社 平成一〇年）を参照のこと。



第2図 内城縄張図

3 那珂城 (なかじょう)

〈別 称〉

なし

〈所在地〉

大字下那珂諏訪山

〈構 造〉

日向灘に流れ込む石崎川の河口から約三キロほど内陸に入った川の北岸に、諏訪山と呼ばれる小ぢんまりした山塊がある。この山塊の西半分に築城しているのが那珂城である。この城は従来は諏訪城、中ノ城、端ノ城と呼ばれ、それぞれ別の城とされていたが、後に述べるように、この城名は各曲輪名と考えるのが正しい。そのため、ここでは本名の名称である那珂城として解説することとする。

さて、この那珂城の縄張を考えてみよう。まず北の曲輪Ⅰであるが、南北約五〇メートル、東西は長径で一〇〇メートルほどの曲輪で、高さは約五四メートルである。西にまっすぐな虎口aを開いている。この虎口は坂を登り虎口を抜けると、やや広い長方形の空間にはいる。高さは低い、北面は土塁状になっているので、柵形虎口を意図した可能性がある。曲輪の東北の角には大きな堀切bを入れる。曲輪側の堀切の壁面の高さは約五メートル、反対側は約一メートルである。曲輪の南面は曲輪Ⅱとの間を切りさく堀切cである。曲輪の東面は横堀dとなっていて、曲輪Ⅱに向かうルートは曲輪の上から抑えるようになっている。このルートは下から登ってくるルートで、曲輪Ⅰの虎口の下から真っ直ぐに下りていく。ただしこの道は本来のルートではなく、北の角から伸びる尾根が本来のルートの可能性は高い。この曲輪Ⅰが伝承名の諏訪城であろう。

続いて曲輪Ⅱである。曲輪Ⅰとの間の堀切は深さ三メートルを越



横堀 d

える。この堀切に面して一直線に土塁を構えている。この面の西端に開口部があり、方形の空間となっている。曲輪Ⅰの虎口aより整った柵形虎口eである。曲輪の面積は曲輪Ⅰと同じくらいで、南北約六〇メートル、東西約六〇メートルである。標高は約五六メートルで城内では一番高い。西の角は、堀切で切断されている。その先は小さな堡壘状の曲輪fになっていて、ここから西と北に分岐する尾根をそれぞれ堀切で切断している。本来こ



堀切 c

の小曲輪は独立させる必要はないのであるが、ゆるい二つの尾根の分岐点なので、小さな堡壘状の曲輪にし、二つの尾根からの敵の防御と、曲輪Ⅱとの間の堀切の通路を抑えることを狙っているであろう。この小曲輪fにより、この城の防御はかなり強化されたと思われる。なお、二つの尾根の内、東の尾根には堀切gを一本入れ、その先にも浅い堀切を入れている。

この曲輪Ⅱの南面は、曲輪Ⅲに続くが、ここにも深い堀切hを入れる。この堀切に面して土塁が設けられている。このように曲輪Ⅱは、三つの曲輪の中央部にあり、高さも一番高く、かつ曲輪ⅠとⅢに対して土塁を設けていること、ルート設定に曲輪Ⅰの周りを歩かすことにより防御を固めていることなどと考えると、この曲輪Ⅱがいわゆる「本丸」で、中心の曲輪にあたると考えてよいだろう。伝承名の中ノ城はこの曲輪Ⅱのことであろう。伝承名からも中心の曲輪であるのがわかる。

曲輪Ⅲは細長い曲輪で南北約六〇メートル、東西約二〇メートルである。虎口は明確ではないが、曲輪Ⅱとの堀切の間の西よりに登り口iがあるので、他の曲輪と比べると弱い気はするが、ここが本来の虎口と考えざるをえない。北の端は堀切を入れ最終防御としている。東北の角に堅堀状の崩れがあるが、これは本来堅堀であった可能性がある。伝承名の端ノ城は、端にある曲輪ということであり、この曲輪Ⅲのことであろう。

以上のように、三つの曲輪で構成されているが、周辺部はかなり広い丘陵部になっている。だが、曲輪Ⅰの西の下の現在畑と山林となっている広い台地は、やや斜面の所はあるがほぼ平坦でもあり居館を構えるのに絶好の地であるが、独立させるための堀を構えた形跡はなく、周囲の面にも壁^{へき}になっていない。自然の地形のままになっているだけであるのは、不可解である。しかし、居住地としては十分使えるので、当然屋敷地として使われていたはずである。

さて、曲輪Ⅰの北を見てみよう。北の尾根続きは細い尾根となっているが、そこから北へ二本の尾根が伸びている。西の尾根には、三本の堀切を入れ、麓からの侵入を警戒している。手前の堀切jはかなり大きい。また、東の尾根の先端は、堀切kがあり、その先は円形の土塁状の高まりに囲まれたマウンドlとなっている。いわゆる狼火台のようにも見える。しかし、炭かまにも似ているので近年の造作の可能性もある。

尾根は本来なおも続くのであるが、この先新しい道路と土採りにより破壊されてしまっている。このあたりが、伝承名の嶺ヶ城にあたる可能性があるが、残念ながらわからなくなってしまった。

なお、この諏訪山の山塊の東半分は字名が城ヶ峰である。ここに嶺ヶ城があった可能性もあるが、ここも畑などにより削られ、かつての姿はとどめていないため、城としての遺構は確認はできなかった。

〈歴 史〉

那珂城の四つの曲輪は、諏訪城、中ノ城、端ノ城であるが、それぞれ別の城として誤認されたのは、比較的最近のことで、平成一〇年発行の『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書』に於いてである。その誤認のもとになったのは、日向の城の調査の原典となる江戸時代の地誌で、平部嶺南の『日向地誌』^{注1}に、下那珂村の「古迹」として、嶺ヶ城以下四城を独立した城として紹介しているからである。しかし、^{注2}よくその文章を読むと嶺ヶ城を除き諏訪城、中ノ城、端ノ城はともに堀を隔てて接しているとあり、三

つの曲輪が並んでいるのがわかる。嶺ヶ城も下那珂村の「山」の頃に四城が城ヶ岡に並んでいるとある。この城ヶ岡は現在の小字名で残る城ヶ嶺と思われる。先ほども述べたように嶺ヶ城の場所は、遺構が発見できないため、現在のところは不明であるが、少なくとも諏訪城の曲輪に近い所にあったと考えてよいだろう。

さて、この那珂城の歴史はよくわからない。文書には全く登場せず、わずかに軍記物の『日向記』^{注3}の中に伊東氏の「分国四十八所ノ城主」として、高城城主、財部城主などに並び那賀城主として郡司弥六左衛門尉とし、続けて小さな字で今湯池出雲守、宇津宮左馬助をあげている。那賀城の「賀」と「珂」の違いはあるが、音も通じるので那珂城とみて間違いはない。そしてこの三名は歴代の城主として注記されている。この城主表は永禄年間のこととされているので、那珂城がいわゆる伊東氏四八城の一つとして存在し、佐土原城防衛を担っていたのは確実である。

また那珂城は石崎川を臨む位置にある。現在は石崎川がやや離れて見えるが、河川は流路をいつも変えているので、この那珂城の場合も室町時代はより近くを流れていた可能性が強い。つまり一ツ瀬川に次ぐ有力な物資運搬ルート^{注4}の石崎川を抑えるのが、この城の目的であったと思われる。

島津氏が佐土原城に入り、このあたり一帯を領有しても、この那珂城の重要性は失われなかったと思われる。そのために、この地域には珍しく曲輪名までもが伝承されたのであろう。

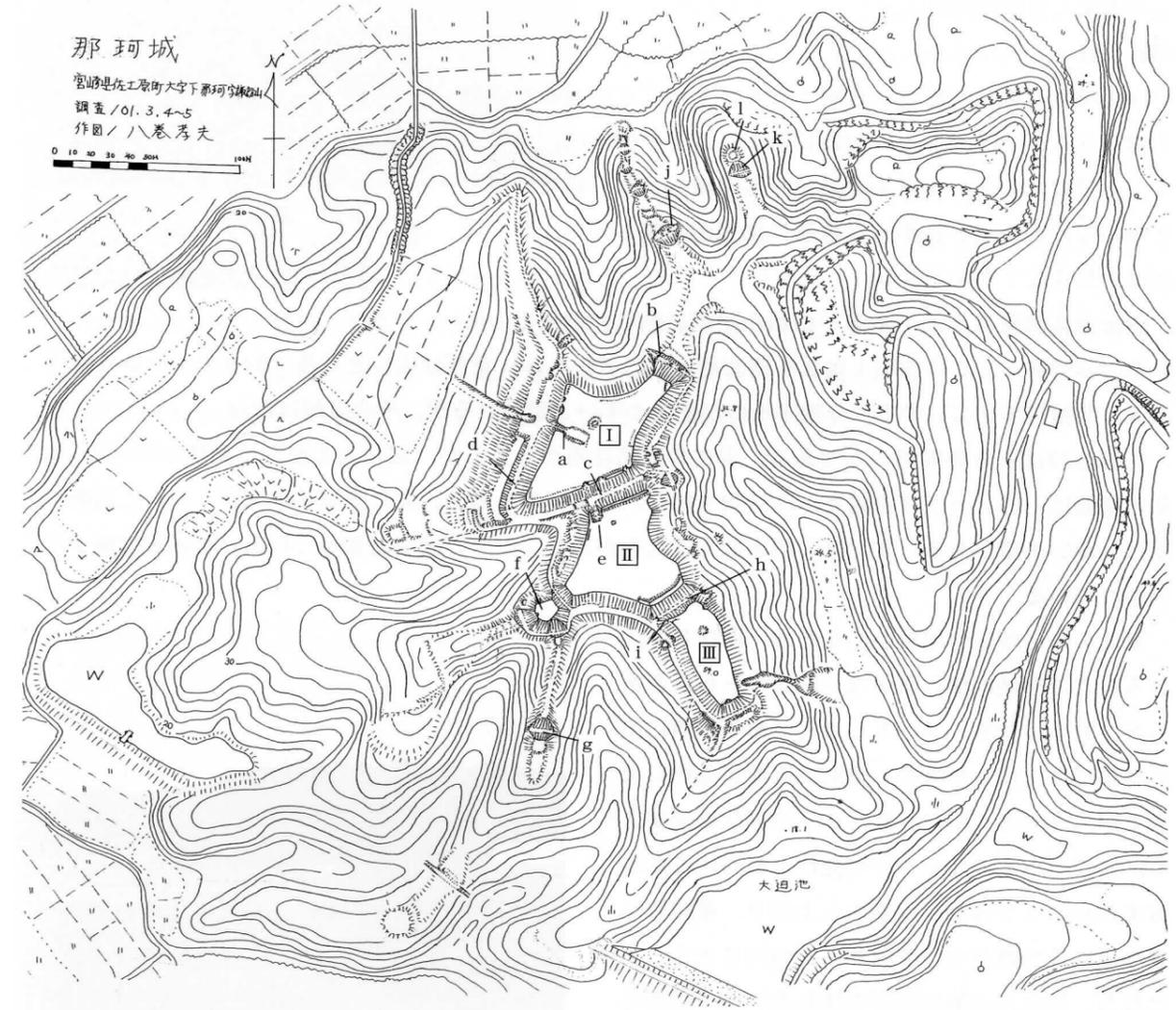
この城は構造の所でも述べたようにさまざまな築城技術を用いている。中ノ城へのルート設定、堡塁状の曲輪の使用、柵形虎口の採用などである。永禄期というよりは天正期の築城技術の可能性がある。伊東氏最末期に改修したか、島津氏が入城後に改修したか、どちらかは今のところ不明とせざるをえないが、その意味で極めて興味深い城であるといえよう。

注

1. 『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書』 I、II (宮崎県教育委員会 一九九八年)。なお、『日本城郭大系』(第一六巻 新人物往来社 昭和五五年)及び『日本城郭全集』(第一四巻 人物往来社 一九六七年)の両書とも、「那珂城」の項目で当城を取り上げている。
2. 『日向地誌』平部嶺南 歴史図書社 昭和五一年復刻版
3. 『日向記』(宮崎県史叢書)宮崎県 平成一一年

〈文献〉

『日向記』、『日向地誌』、『宮崎県中近世城館跡緊急調査報告書』I、II、『日本城郭大系』、『日本城郭全集』



第3図 那珂城縄張図

4 内田城（うちだじょう）

〈別 称〉

なし、内田城は仮称

〈所在地〉

大字東上那珂字内田

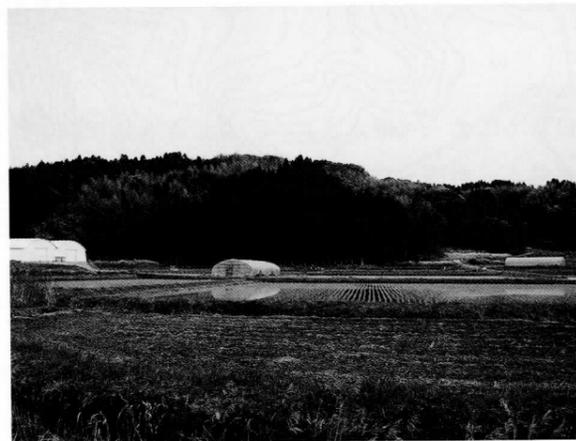
〈構 造〉

内田城は石崎川が蛇行し宮崎市に入っていく寸前の右岸にある標高八六、一メートルの山頂にある。直下の街道は、メインルートではないものの佐土原城から宮崎城へつなぐ最短距離である。この内田城の山からは複雑に尾根が分岐していくが、山頂はかなり広く平坦である。

内田城の縄張は単純である。山頂を平坦に削り、曲輪としているのみである。この曲輪Ⅰは広く南北約一五〇メートル、東西は広いところで約九〇メートルほどである。曲輪自体が広いので、分割するのが使いやすいと思われるが、その気配はない。

防御施設は三方の堀切のみである。現在の道路は南から入るが、城に入る直前に堀切aがある。城内側の壁面は一〇メートルを越え、反対側も約一、五メートルある。東に縦堀状に堀が入る。この堀切の上は、薄い土塁がある。また東の側面は大きな谷があり、天然の堀切となっている。この谷は城ヶ迫といわれている。

東北の角には短い尾根があるため、堀切bを入れる。ここも城内側の壁面は一〇メートルほどあるが、対岸は低く一メートルほどである。西に出る尾根には虎口cがある。普通の直進する虎口であるが、そのすぐ下に谷筋へ下りる堀状の道がある。ここが本来のルートの可能性がある。これが本来のものとすると、谷筋から上がり、尾根に小さな堀底道を通り九〇度曲がって城内に入ることになる。ほとんど築城技術を使わない城ではあるが、ここはかなりの防御性の高い技術といえる。



内田城 全景

尾根の先は小さな堡壘状の小曲輪Ⅱがある。薄く土塁がめぐっている。この小曲輪で、虎口を防御しているであろう。この曲輪の先はやはり堀切dを入れる。ここは城内側約七メートル、対岸は約一メートルである。その先にも堀切らしきものがあるが、切断面が弱く堀切とは断定できなかった。

以上のように極めて単純な単郭の城である。ただし、虎口が想定通りとすると、かなりの築城技術を持つ集団がつくったことになる。広い面積をどのように使おうとしたのかは謎であるが、純軍事的な城



内田城 堀切 a

堀内は城の関連地名とは限らないので注意を要する。

城の性格としては石崎川の監視と佐土原城と宮崎城の最短距離の街道の監視のためという考え方が一つ。城が単郭で大きいことに注目して兵站基地の城という考えの二通りある。もちろん三つ目として二つの目的を兼ねた城という可能性もある。結論はこれからの課題であろう。

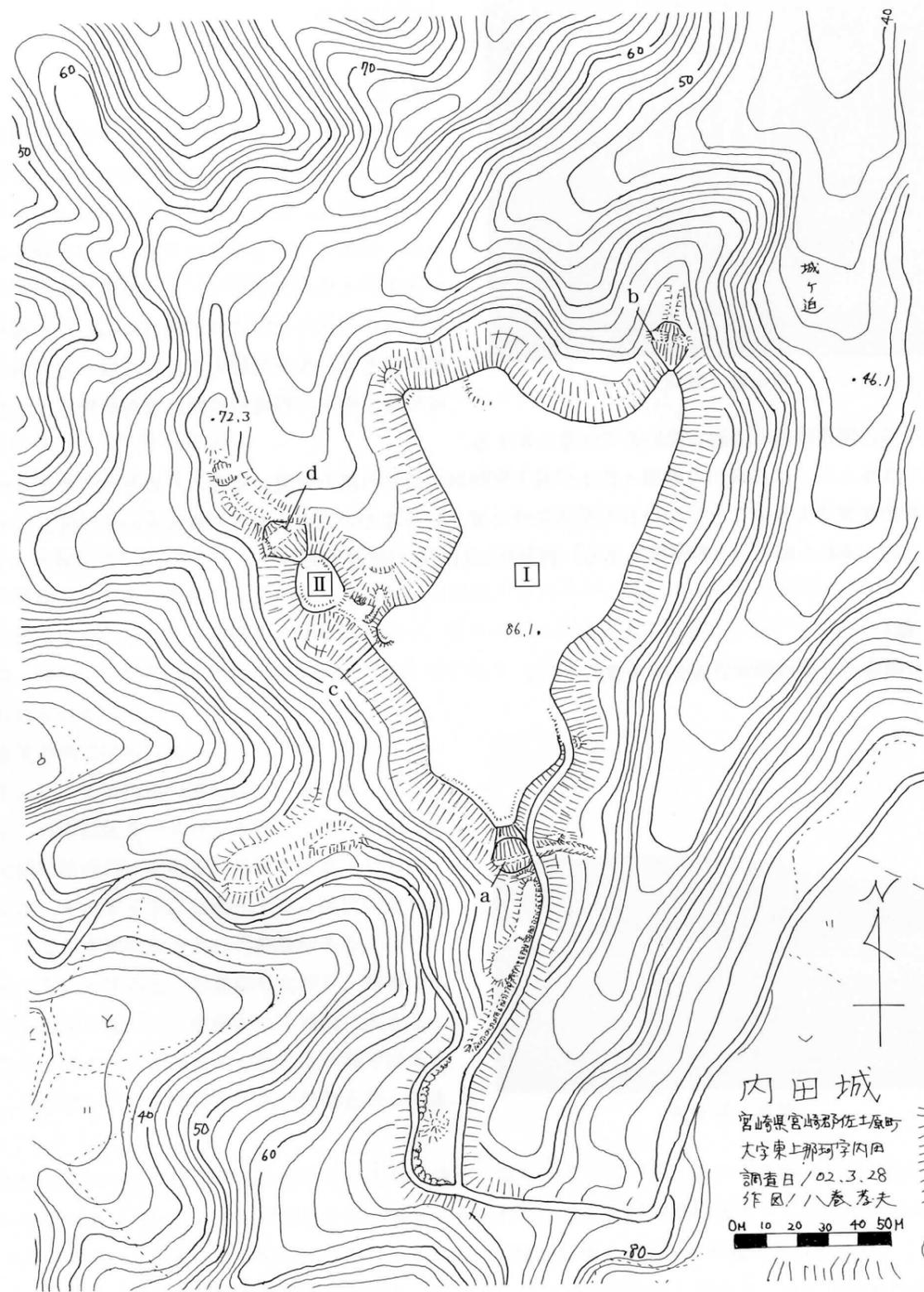
〈文 献〉

『宮崎県中近世城館緊急調査報告書』Ⅰ、Ⅱ

と考えられる。

〈歴 史〉

内田城の歴史は不明である。一九九八年発行の『宮崎県中近世城館緊急分布調査報告書』で初めて紹介された。従って内田城の名称は、仮称であるが、城名をつける場合小字名の内田を採るのが一番よいと思われるので、この城名で呼びたい。また城の周辺の小字に城郭地名がいくつか残る。城の北と東、西を包む大きな谷は城ヶ迫であり、城の西の直下で石崎川の間堀内が残る。ただし



第4図 内田城縄張図

5 西ノ城 (にしのじょう)

〈別 称〉

金丸城

〈所在地〉

大字下那珂字西ノ城

〈構 造〉

西ノ城は石崎川の支流亀田川に臨む丘陵地にある。亀田川が眼下を流れており、ここを要害として築城している。なお、現在の亀田川は近年の流路変更で城からやや離れているが、本来は川に接していた。北から流れてくる亀田川そして石崎川の流域の見通しがいい。また佐土原城から宮崎平野を抜ける陸路も、この城の下での狭い地点を抜けており、その抑えにもよい地点



である。

構造は比較的単純で、南北に三つの曲輪が並んでいる。北の曲輪Iは、すでに土採り場となり曲輪内は何か所も大きく掘られている。曲輪の周囲は土塁がめぐっていたらしいが、南の一部を除きわずかな痕跡を残すのみである。



西ノ城を東より臨む 中央部が曲輪II

曲輪IIは中央の曲輪で、完存している。曲輪Iとの間は、堀切aで断ち切っている。曲輪IIの土塁はこの堀切に三角形に突出していて櫓台bとしている。曲輪面から約五メートルの高さがあり、曲輪Iを完全に抑えている。櫓台bの上には簡単な櫓がつけられていた可能性が強い。土塁は東の半分の除き四周をめぐっているが、北面が高い以外は比較的低い。

虎口cは南の面のほぼ中央部にあるくぼみと思われるが、かなり壊れている。曲輪面には土塁の裾に溝があるが、これは畑であったときの根切りであろう。

曲輪IIの南には大きな堀切dがあり、曲輪IIIと分断している。この堀切は堀底が七~八メートルあり、かなり立派なものである。堀切の西の方に二本の堀に直角する溝が残る。堀底の障壁かもしれない。



西ノ城 巨大な堀切d

曲輪Ⅲはほぼ三角形の曲輪である。曲輪の角には土塁が残っている。本来は全周していたかもしれない。この曲輪Ⅲの南から谷が入りこんできている。この谷を天然の堀切として利用し、曲輪Ⅱ、Ⅲを台地から独立させていた。この谷に続いて曲輪ⅠとⅡの東にも横堀があったはずであるが、畑の耕作に埋められたせいか、既に失われている。

以上の三つの曲輪で西ノ城は成り立っている。さていわゆる本丸にあたる主郭はどこであろうか。曲輪Ⅱは高さが一番高いこと、北の曲輪Ⅰに対して強力な櫓台をつくっていることなどから、曲輪Ⅱがいわゆる本丸で主郭と考えてよいだろう。

この城の西南に小高い丘Ⅳがある。現在は宅地となり、壊されていてこれといった遺構はないが、これも西ノ城と呼応して亀田川を抑える別郭であった可能性がある。

〈歴史〉

この城もはっきりした歴史はわからない。『日向地誌』には、「金丸城トモ云金丸勘四郎ト云者」がいたとする。『日向記』によれば伊東氏の幕下に金丸氏がいるので、一族の可能性はある。

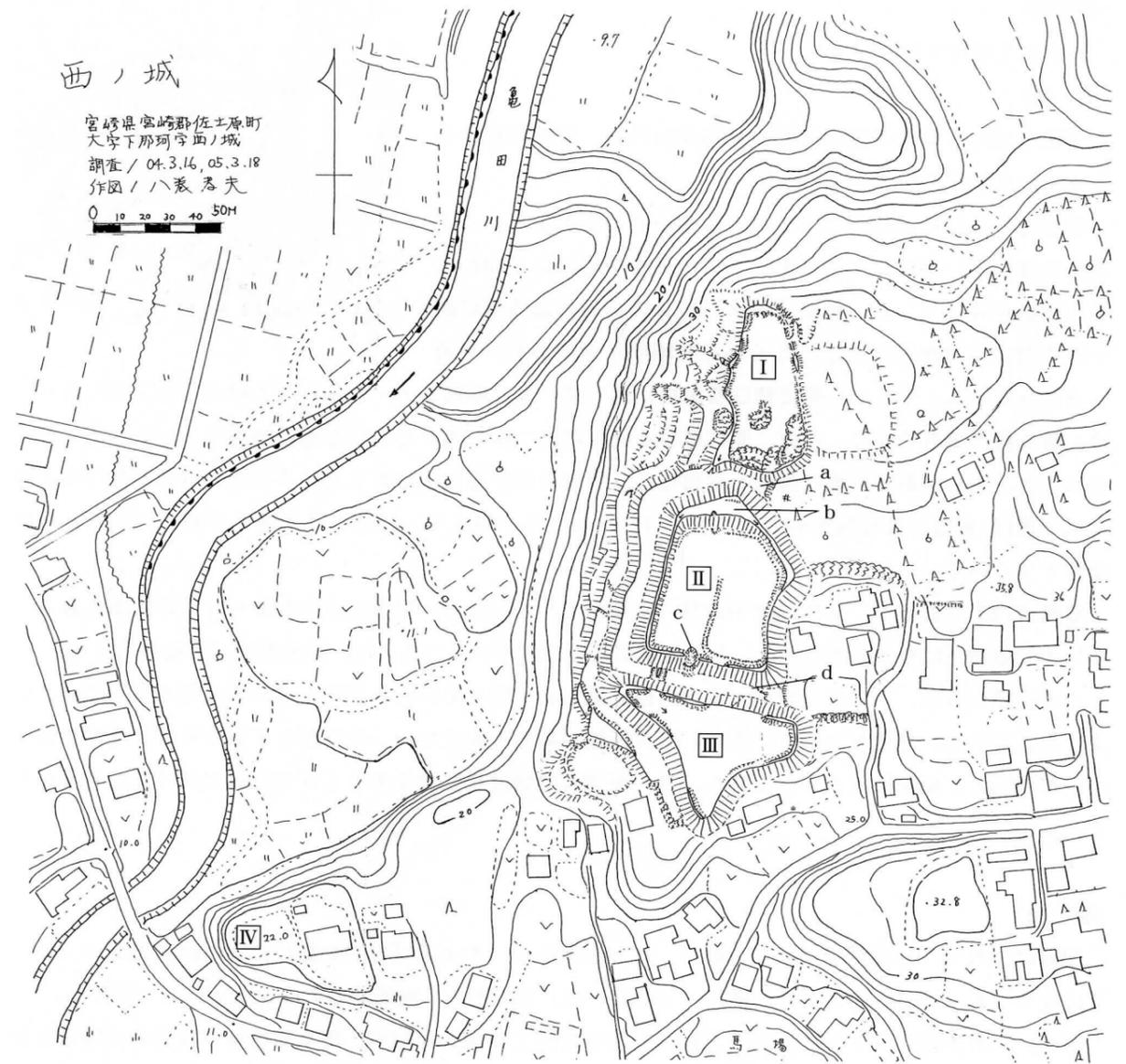
この城は位置から見て那珂城の支城と思われる。というのは、那珂城から北西の方向はこの西ノ城の丘にさえぎられ見通しがきかない。そのため、この西ノ城に築城すれば、亀田川、石崎川の北と西の流域も視野におさめることができる。西ノ城は那珂城の北と西の見張所であったのであろう。

西ノ城の名も、那珂城からは北西にあたるが、おおざっぱに西の方向とみて、西ノ城と称したのではなかろうか。

なお、西ノ城の周囲には城郭関連地名の小字名として、「西ノ城」と「馬場住」「白坂」（城坂？）などが残っている。

〈文献〉

『日向地誌』、『日本城郭大系』、『宮崎県中近世城館緊急分布調査報告書』Ⅰ、Ⅱ



第5図 西ノ城縄張図

6 福城寺 (ふくじょうじ)

〈別 称〉

なし

〈所在地〉

大字東上那珂字福城寺

〈構 造〉

福城寺は、宮崎県中近世城館の分布調査の折、城館関連地名として取り上げられたものである。

福城寺の小字には標高六三メートルの小高い山がある。この周囲では、高い方の山であるが、この山頂を中心にいくつかの堀の遺構が残っている。標高六三メートルの山頂には方形に削った空間に小さな祠がある。ここから縦堀状に道があり、参道 a となっている。ここから西に伸びる尾根に溝 b が一本 (幅約二メートル、深さ約八〇センチ) あり、南へ縦堀状に落ちていく。一方、北に伸びる尾根には二本の溝 c と d (ともに幅約三メートル弱、深さ約八〇センチ) がある。東に伸びる尾根には、参道の切り通し e があり、そこを越えてなおも行くと堀切状の溝 f がある。これはやや大きく深さは二メートルを超える。また、この溝から斜めに土塁 g が東南へ下っていく。

遺構は以上であるが、全体に削平が甘く平場ができていない。堀切のような溝も、東の一本を除き、薄いので堀切とは断言できない。しかし堀切のような溝がいくつもあり、城郭遺構の可能性もある。

この山頂からは、北に佐土原城、東南に西ノ城がよく見える。また西に石崎川の流域も見える。このようなことから、見張台として設置された可能性があると考えたい。そうだとするならば、溝はやはり小さな堀切で、敵を防ぐというよりも、この堀切の内側は見張台であるとする標識であったと考えられる。

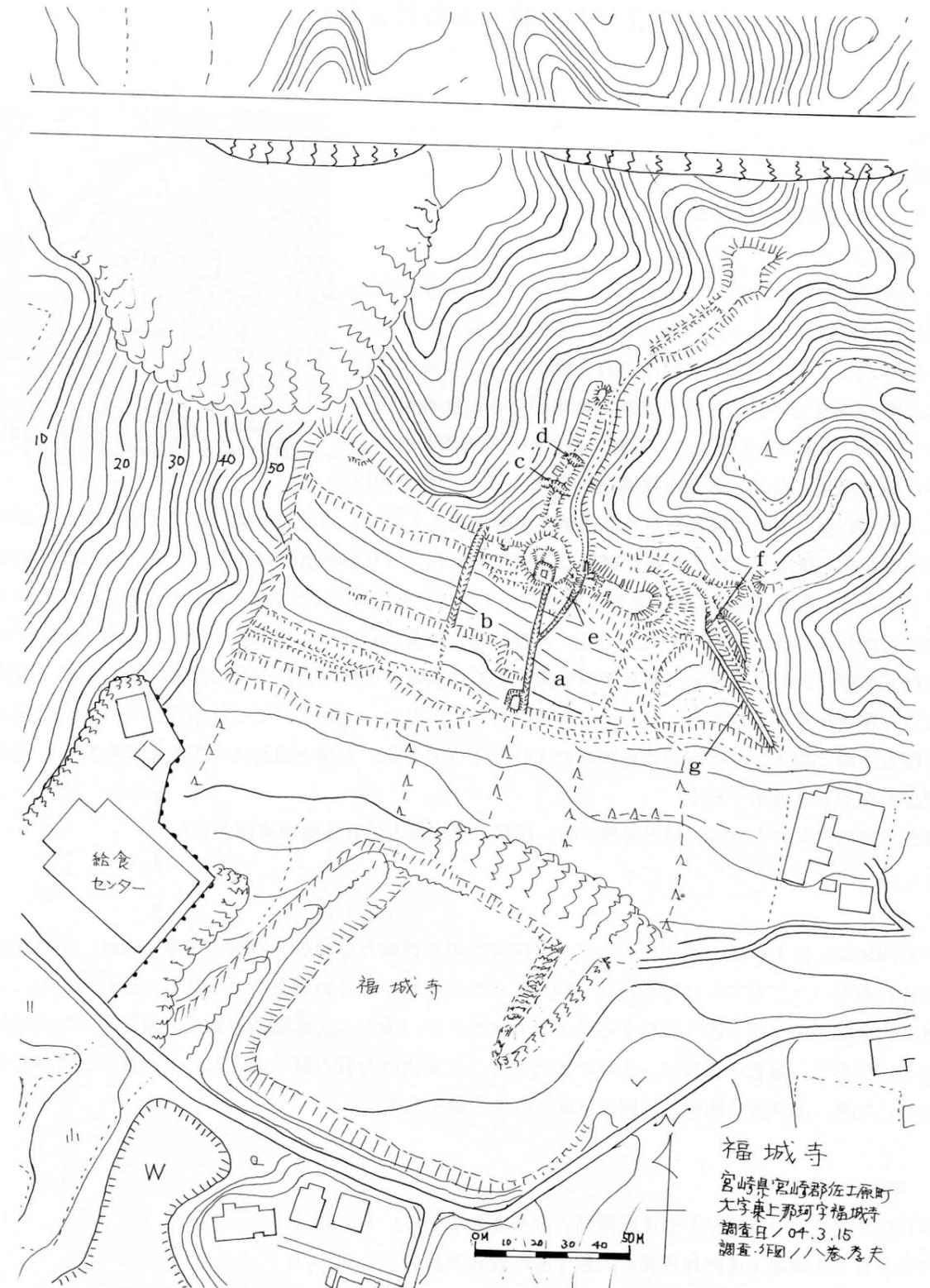
〈歴 史〉

記録にはなく、一切歴史はわからない。ただし地名は、本来は『日向地誌』によれば福城寺の「城」ではなく「成」で福成寺であり、また、「常」「祥」の説もあり城館地名ではなかったようである。

また、これが城だとすれば、先ほど述べたように佐土原城と那珂城、西ノ城を結ぶ見張台の役目を果たしていたと思われる。

〈文 献〉

『宮崎県中近世城館緊急調査報告書』 I、II



第6図 福城寺縄張図

7 古城(ふるじょう)

〈別称〉

なし

〈所在地〉

大字下田島字田島、字古城

〈構造〉

一ツ瀬川を臨む南岸の丘陵地にある。しかし、字名として残る古城の地はほとんどゴルフ場となり、城郭遺構は一部を除き残らない。わずかにゴルフ場にはずれた地に天神、小城といわれる丘陵が残っている。丘陵の先端に菱形の小さな曲輪が残っていてこれが小城であろう。この曲輪の南に小さな堀切があり、台地に続く尾根となる。台地とは高さ約五メートルの壁で切り落とされている。南には横堀もしくは通路の遺構が残っている。以上の遺構のみで、他のほとんどの遺構は失われた。従って古城の正確な縄張は不明であるが、『日向地誌』によれば、北、東、西と切り立っているため、西南の方面に堀を入れて要害としていた。また城内は五つの曲輪に分かれていたという。地元の伝承によれば、上城、下城、小城、天神、鎮王の五つの曲輪名が伝わっていた。第7図の古城の推定復元図は、大町三男著の『都於郡伊東興亡史』に掲載の青山幹雄氏作製の見取図をもとに、縄張図のように筆者が推定で描き直したものである。これによれば、天神と下城は谷が入っていて、上城と下城の間と上城と鎮王の間は堀切に分割されていたようである。古城のほとんどが失われた現在、大体の様子がわかるのは貴重である。

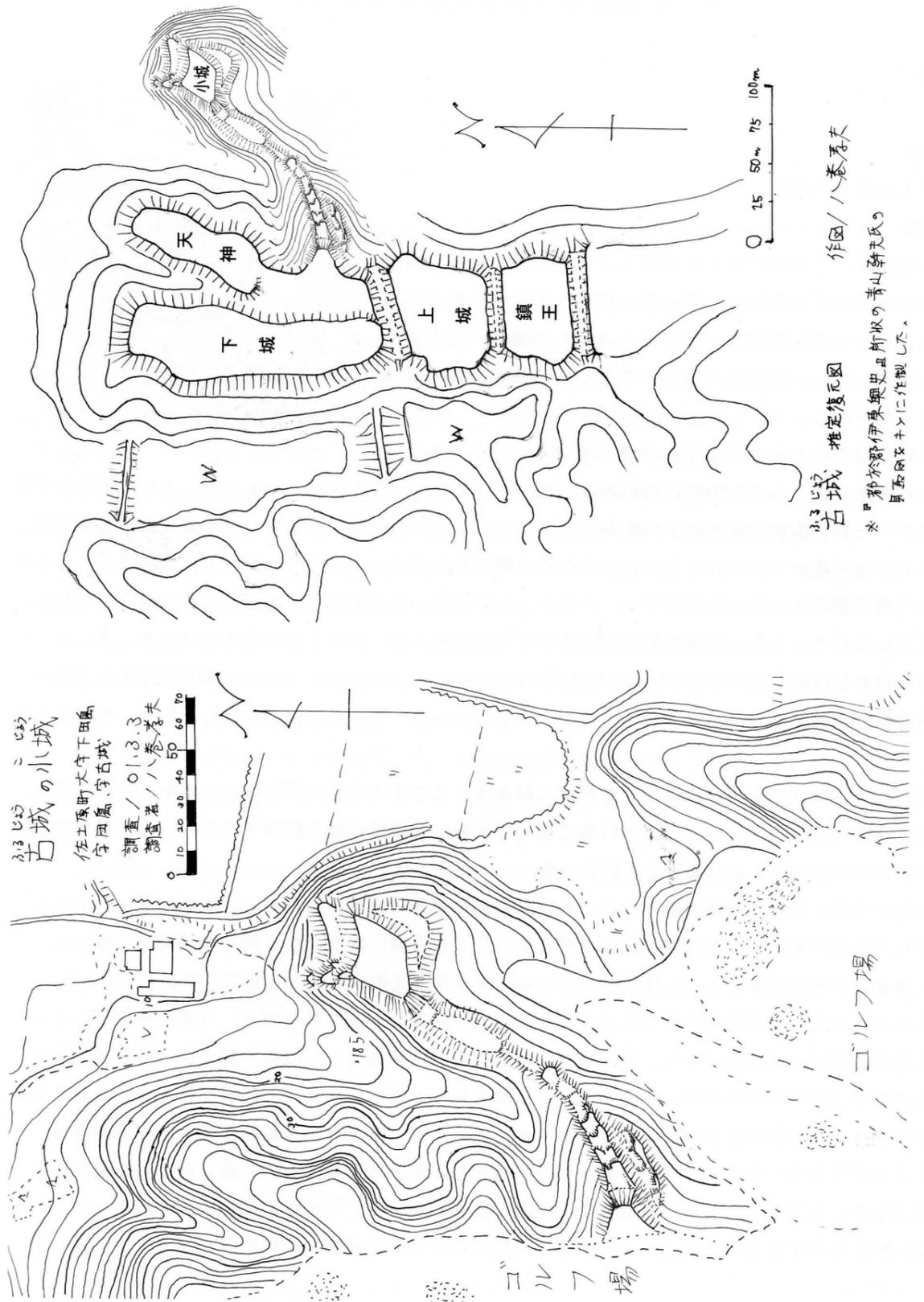
また、平成五年に古城の天神が発掘され、段状の形成面と堀立柱跡が確認された。

〈歴史〉

『日向地誌』によれば、地元の言い伝えで伊東祐明の居城といわれていた。伊東祐明は、工藤祐経の孫で建長四年(一二五二)に田島荘に下向し、田島氏を称し、この城をつくったといわれている。この築城の伝承はあまりにも古く信用することはできないが、少なくとも田島伊東氏の城であったのは認めてもよいだろう。城名の古城は、田島伊東氏が佐土原城に移る前の城であったことを暗示していると思われる。なお、より古い祐明の居館伝承地として古城もある。

〈文献〉

- 『日向地誌』、『宮崎県中近世城館緊急分布調査報告書』I、II、
- 『宮ヶ迫・古城第1遺跡報告書』(佐土原町教育委員会 一九九四)
- 『都於郡伊東興亡史』 大町三男 昭和五九年



第8図 古城推定復元図

第7図 古城の小城縄張図

8 平田迫城（ひらたさこじょう）

〈別 称〉

なし

〈所在地〉

大字上田島字平田迫

〈構 造〉

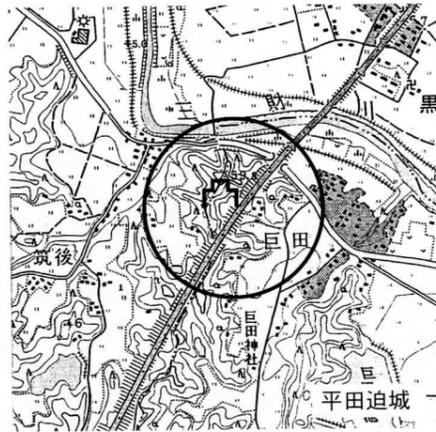
平田迫城は、三財川に対して北からぶつかる長く伸びた樹枝状のやせ尾根の上に築城されている。現在は東九州自動車道の建設により中央部が破壊されているため、その調査の報告書^{注1}のもとに説明したい（筆者も発掘中に見学しているが、縄張図は描いていない）。

城域はかなり広く南北七〇〇mに及んでいる。その北より三分の一あたりに、大きな堀切の道がある。幅約六メートル、深さ約七メートルで、これは近年まで使用されていた都於郡佐土原を結ぶ旧街道であったという。この堀切の道を挟んで樹枝状の尾根が伸びるが、その尾根の広がる所にいくつかの小さな段で構成された四つの城をおいている。報告書の見張台跡1（以下報告書の図の番号を使用する）がその一つである。中心部に小さな段のIをおきその周囲に段をめぐらしている。三方に尾根が伸びるがそれぞれ堀切を入れ、城として独立させている。そして、なお伸びる何本もの尾根に小さいながら合わせて五本の堀切を入れている。二つ目の城は見張台Iの西で、ここは自動道の範囲でなかったため、番号がついていないが、ここも曲輪で現存している。堀切は五本ある。

旧街道の堀切をはさんで南には、見張台跡2がある。ここも中央部のIVに中心の段をおきその周囲に小さな段をおいている。また、この城は南に堀切で入れ、北は段の壁で防御するのみである。周囲の樹枝状の尾根には六本の小さな堀切を入れている。

四つ目の城は、堀切3の南である。ここも自動車の範囲ではなかったため、番号はついていないが、明らかに四つ目の城である。ここも中央二段をおき、周りを腰曲輪で取り巻いている。南と北の尾根に堀切を入れ独立させている。周囲の樹枝状の尾根には堀切を四本入れている。

以上のように旧街道の堀切の道をはさんでやせ尾根に四つの小さな城を置き、周囲の尾根に小さいながらも多数の堀切を入れるという、実に異例の縄張である。機能としては都於郡と佐土原を結ぶ街道の監視と遮断が主たるものである。監視所としては都於郡城と佐土原城までも見通すことができることを考えれば絶好の位置であるといえよう。また、直下を流れる三財川とやや離れるが一ツ瀬川の流域をも見通すことができる。そして、佐土原城と都於郡城を結ぶ街道を遮断するのに都合がいいことから、関所の役割を持った城といえそうである。また周囲の数多い堀切も、尾根上の四つの城に敵を上げないために築かれたものであろう。以上のことから、名称は仮称であるが四つの城を合わせて平田迫城と呼ぶことにしたい。



注

1. 『平田迫遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター 2000年

〈歴 史〉

この平田迫城の歴史は全く明らかではない。伝承もないため、ごく最近まで気づかれずにいた。発見されたのは、東九州横断道の調査によってである。

さて、先述したように、この平田迫城は、都於郡と佐土原を結ぶ最重要街道を抑えるためにできた城であろう。この最重要街道の監視、遮断、確保がこの城の目的で、そのために広い曲輪を取れないことから、小さいながら四つの城をつくり、それぞれに責任者を入れ、少数ながら兵員を収容したと思われる。なぜ、都於郡城と佐土原城をつなぐ街道に、このような関所の城が必要だったかを考えると、三つの契機がある。一つ目は天正五年（一五七七）の伊東氏の没落の時であるが、あつという間に伊東氏は崩れているのでこの城は築く間にはなかったろう。二つ目は、天正一五年の豊臣軍の佐土原城包圍である。包圍してから一月あまりあるので、豊臣軍の武将の構築の可能性はある。三つ目は慶長五年（一六〇〇）の伊東氏の宮崎城の占拠とその後の戦いである。この時の戦いは激しかったので、都於郡城と佐土原城の連絡路の確保のため島津軍による構築の可能性である。

一つ目の伊東氏はないとすると、二つ目の豊臣氏、三つ目の島津氏の可能性である。そのどちらの構築にかかるものだろうか。そこで想起されるのは、この平田迫城に似たタイプの陣城の存在である。例えば天正一一年ごろ岡山の岩屋城を包圍した宇喜多氏（羽柴氏の配下）の城は、堀切こそないものの尾根上に延々と土塁状の細長い平地を設け、ピークには簡単な曲輪をいくつも設けて、陣地としている。発想的にはこの平田迫城と似ているとよくだらう。平田迫城は包圍の城ではないが、細長い尾根を土塁に見立てて、そこに堀切と簡単な曲輪の陣地でラインをつくる発想はかなり似かよっている。

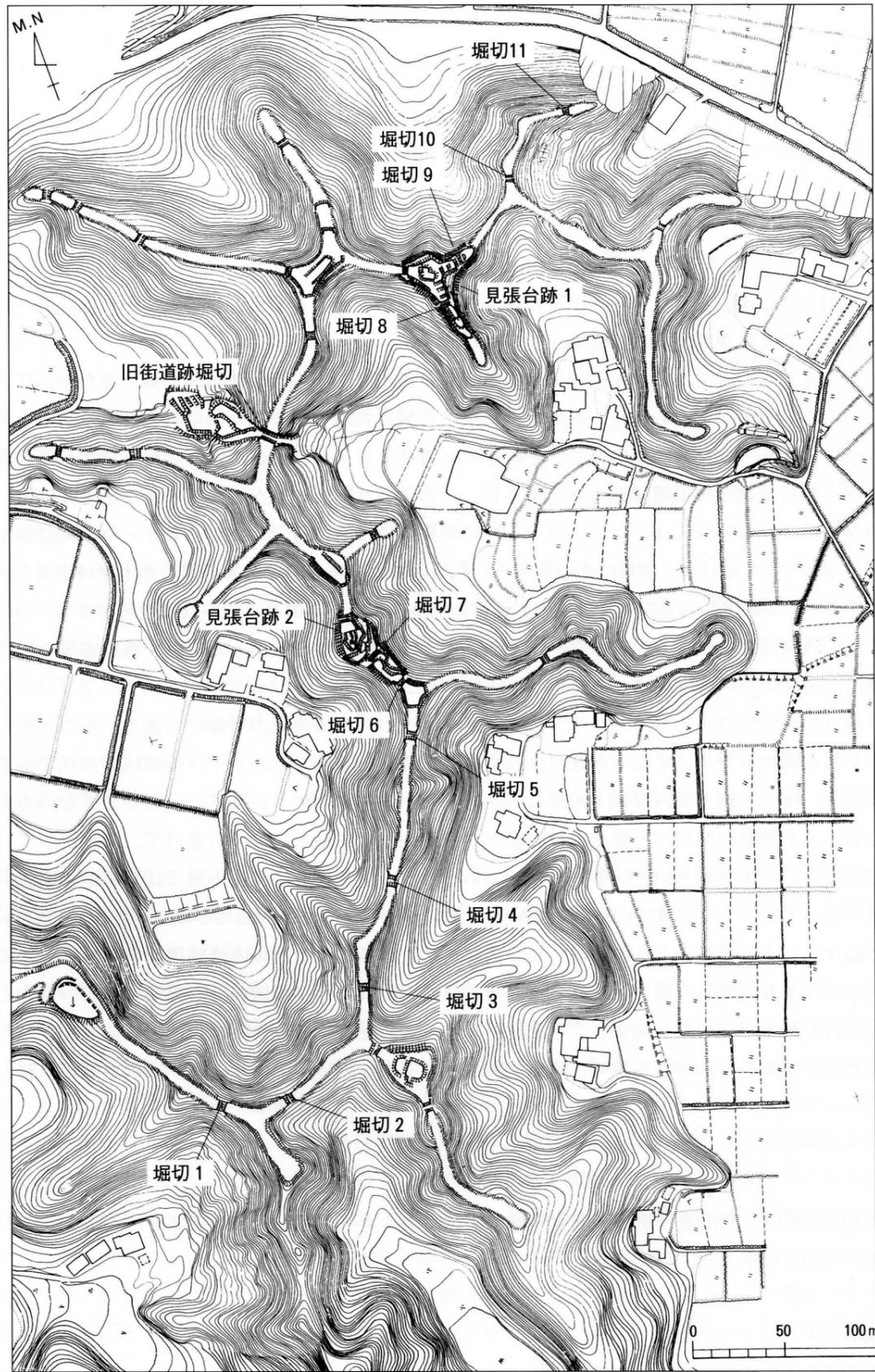
次に島津氏による構築かどうかだが、島津氏が、都於郡城と佐土原城の連絡確保のためにつくる可能性はあるにしても、平田迫城をよく見ると、連絡確保というよりは両城の間を遮断するという方に目的があると思われる。これらを勘案して可能性が高いのは、豊臣軍の佐土原城包圍の時につくられた陣城とする考え方である。もちろんすぐに結論が出るものでもないため、とりあえずこれからの課題としておきたい。

注

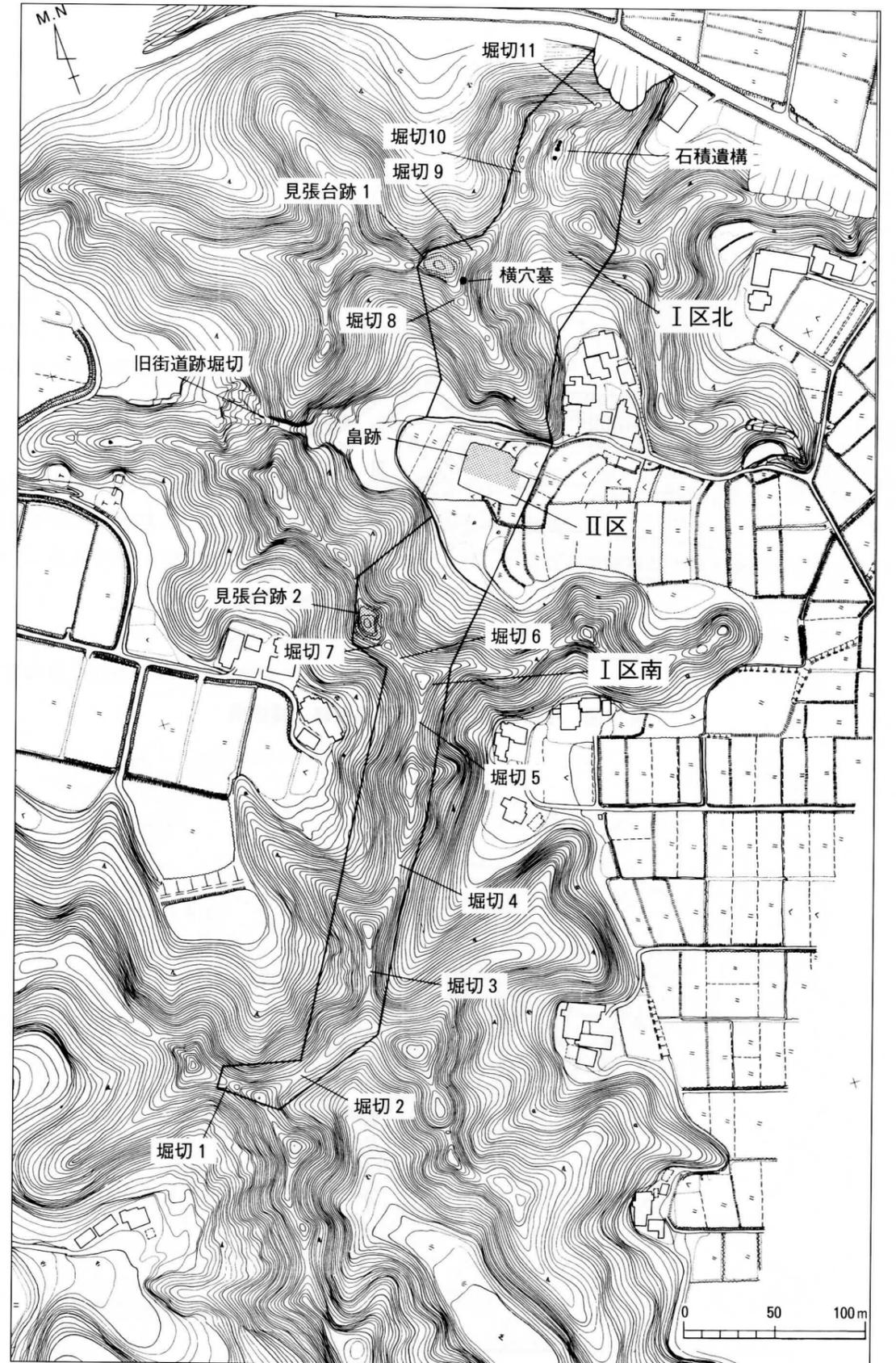
1. 岩屋城付城図 高田徹『第二二回全国城郭研究者セミナー「陣城・臨時築城をめぐって」レジメ』中世城郭研究会 二〇〇五年

〈文 献〉

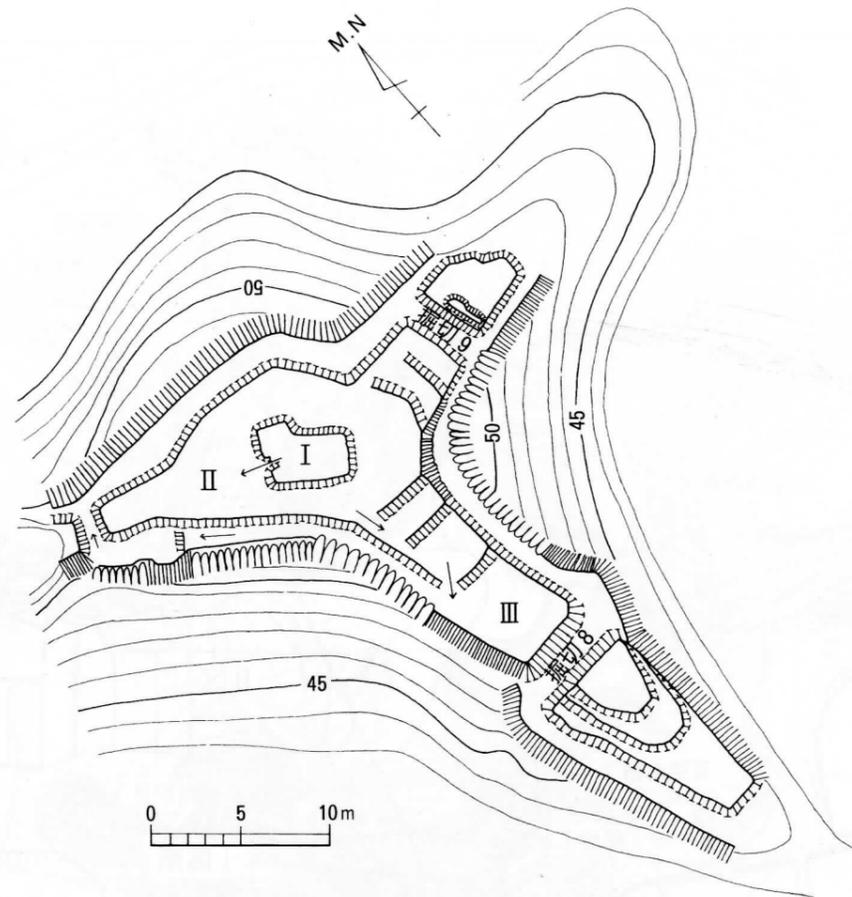
『平田迫遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター 二〇〇〇年



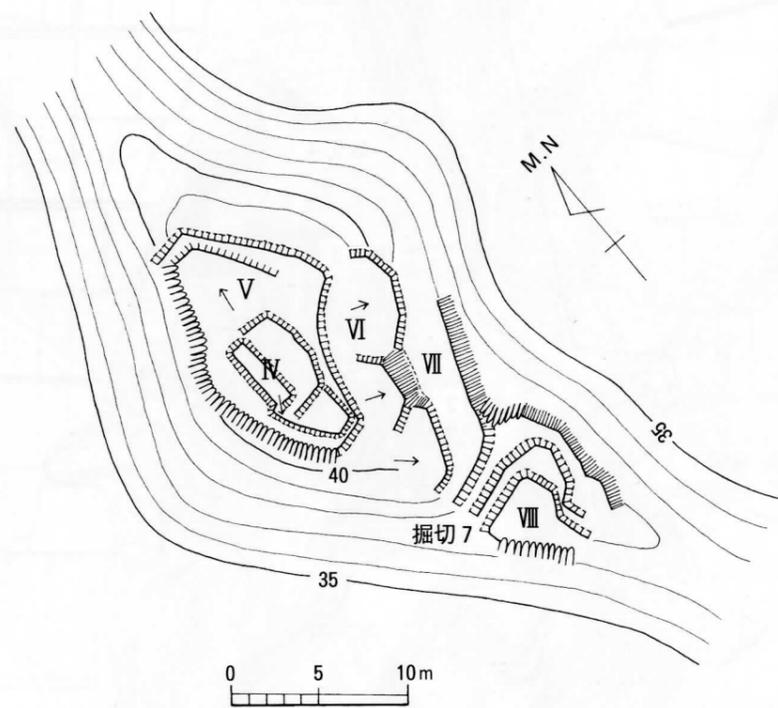
第9図 平田迫遺跡全体縄張図（『平田迫遺跡』〔宮崎県埋蔵文化財センター〕より）



第10図 平田迫遺跡調査区位置図及び遺構分布図



第11図 平田迫遺跡 I 区北見張台跡 1 縄張図



第12図 平田迫遺跡 I 区南見張台跡 2 縄張図

9 新城 (しんじょう)

〈別称〉

なし

〈所在地〉

大字上田島字新城町

〈構造〉

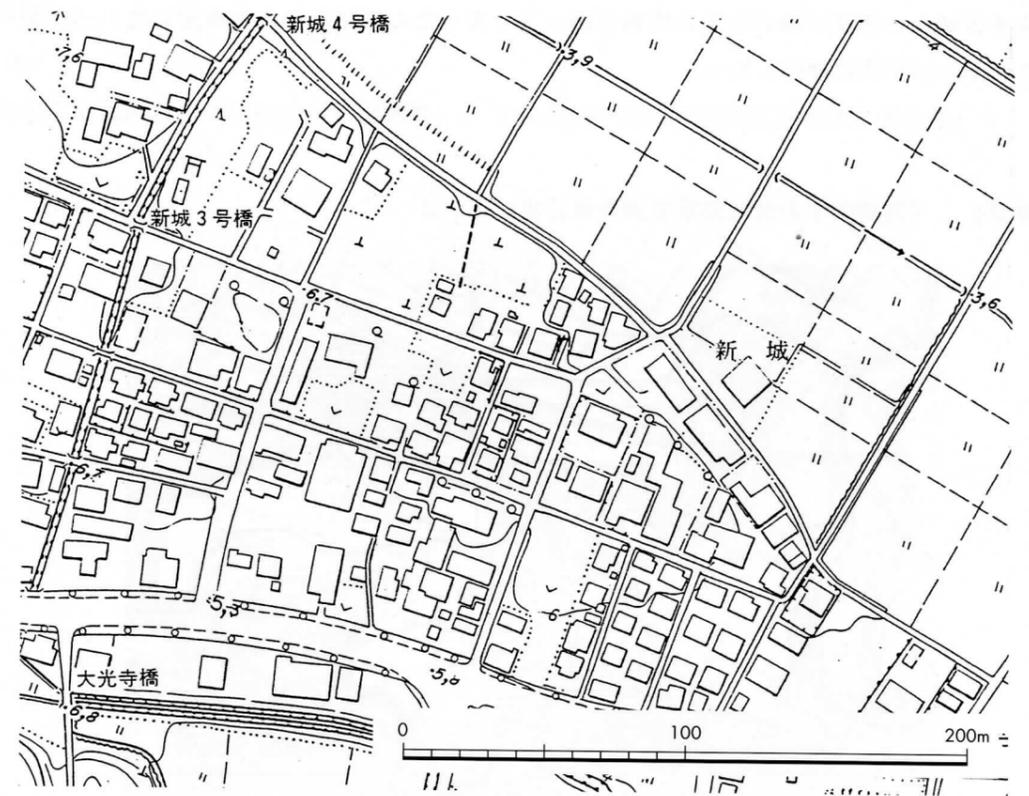
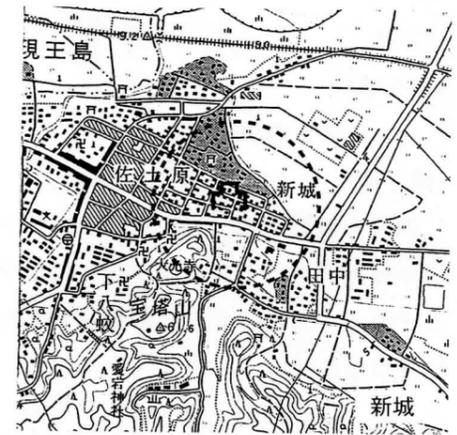
新城の字名が残るだけで遺構は発見できなかった。新城の字名のある台地は舌状台地なので、その先端付近の可能性が高い。

〈歴史〉

田島伊東氏の本拠であった古城に対しての新城と思われるが、詳細は不明。可能性としては、三財川と一ツ瀬川の合流点に近いので、水上交通の権益確保の城であったのではないかと推測される。平地なので簡単な土塁と堀の城であったろう。

〈文献〉

『宮崎県中近世城館緊急分布調査報告書』 I、II



第13図 新城推定地現況図

10 南岳原城 (なんがくばるじょう)

〈別 称〉

古城
こじょう

〈所在地〉

西上那珂字南学原

〈構 造〉

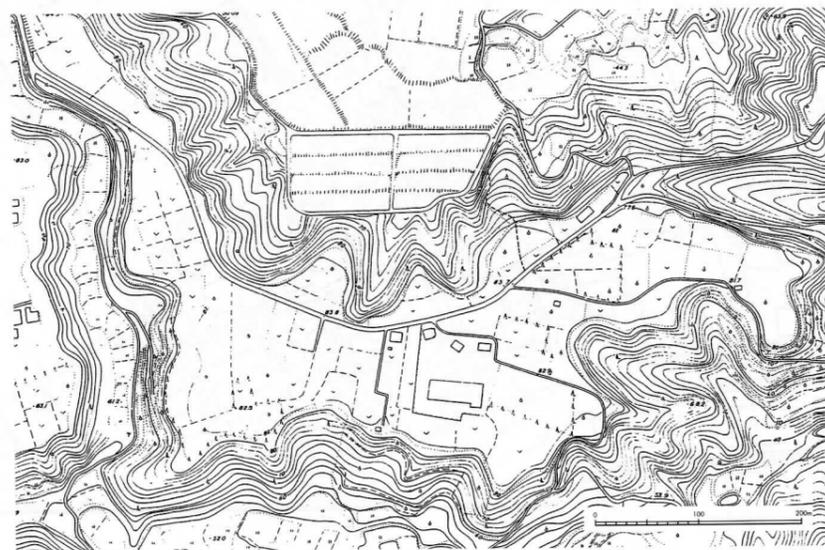
内城の西の尾根伝いに八〇〇メートルほど西へ行くと、また広い台地が開ける。ここが現在は南学原といい、南岳原城の地とされる。台地はかなり開墾されたためか、城の堀切などは一切見つからない。

〈歴 史〉

『日向地誌』では次のように記している。「木村の北ニアリ其地南北深谷を帯ヒ東西ハ曠原ニ接ス故ニ隍壘ヲ設テ要害ヲナス何レノ世何人ノ創築セシモ詳ナラス今唯古城ト呼フ」とする。現状は『日向地誌』のいうように、南と北は谷になっていて、東は尾根伝いにしばらくいくと広い原に接する。西は地形が細くなり、そのまま平地に下る。とすると、隍（堀）を設けたのは、東の平地に続く狭くなった地点に堀を入れることになるが、その形跡はなかった。そこで内城の歴史の項で述べたように、この南岳原城は本来平部嶺南の誤認で隣の台地の内城と誤ってしまったのではないかと推定したい（内城の項を参照）。これからの研究に期待したい。

〈文 献〉

『日向地誌』、『宮崎県中近世城郭緊急調査報告書』I、II



第14図 南岳原城推定地現況図



11 平 城 (ひらじょう)

〈別 称〉

なし

〈所在地〉

大字上田島字平城か？

〈構 造〉

昭和の初期の史跡調査である『宮崎県史蹟調査』に、平城として載っている。それによれば「平坦なる田園の一部にして、別に壘砦其他の設備を施さず」とあり、昭和二年の段階では既に遺構はなかったようである。また大町三男氏の『都於郡伊東興亡史』には、長楽寺址の北に平城の位置を定めている。だが、現在その地には城館の遺構は一切みつからない。なお、低い山城の古城に近いので、セットの平地の居館なので平城といった可能性がある。

〈歴 史〉

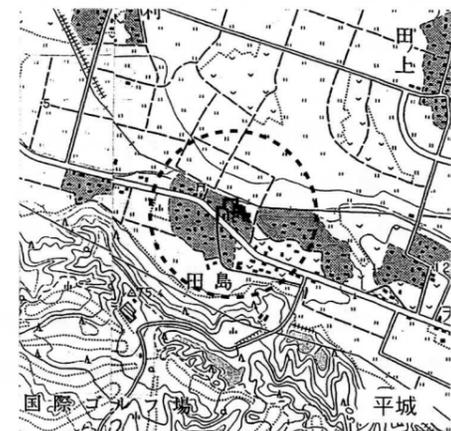
『宮崎県史蹟調査』では、伊東祐明が田島庄に来て初めてこの城に住んだという。そして田島城（古城か）を築城する前の仮の館の跡であるとしている。

〈文 献〉

『宮崎県史蹟調査』（昭和二年 宮崎県）、『宮崎県中近世城館緊急分布調査報告書』I、II



第15図 平城推定地現況図



12 広瀬城

〈別 称〉

なし

〈所在地〉

大字下田島字袋

〈構 造〉

現在広瀬城は石崎川の右岸にあり、川沿いの丘を利用して築かれたものである。地形の高まりが、それと推測させるだけである。幸い『佐土原町史』に広瀬城の当時の計画の城下図が口絵に掲載されているので、それをもとに現在の地形に推定で描いた図で説明したい。

縄張は藩士の山鹿流の軍学者森五太夫がつくったといわれる。

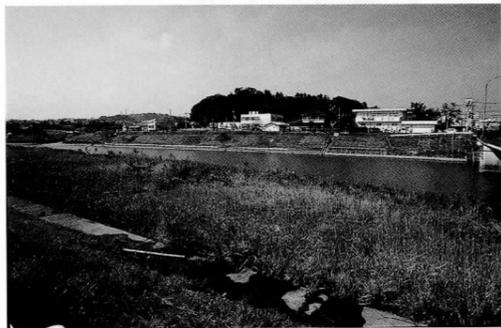
まず、要害とした石崎川沿いにジグザグの塁線 a を築いている。小刻みに塁線を動かしているの、石垣で築くつもりだったかもしれない。この内側が外郭で曲輪Ⅲとする。塁線の東よりに枳形虎口 b を作り、川に橋を架けこの虎口に入るようになっている。東側の塁線は下がっていく地形を利用し、時折大型に曲げていく。たぶん地形なりに曲げていったのであろう。北面は、西の大きな池 c を利用して堀とし、狭い高まりに、小さな枳形虎口 d を開く。南面に比べ小さいので、位置づけは北面が大手であり、南面は搦め手であったろう。一方西面は、久峯の山地から流れでる権現川を要害としている。

以上が外郭の塁線で、その内側に主郭部がある。本丸にあたるのが、現在でもやや高い広瀬中学校のあたりで曲輪Ⅰである。東側の面に城壁のかつての面影がうかがえる。ただし、中学校のグラウンドの南側に低い土塁状の高まりがあるが、これは当時の土塁ではない。

本丸の曲輪Ⅰの南側が曲輪Ⅱで、現在の広瀬幼稚園のある所で、塁線により二つに分割されている。

幼稚園の南の丘は、もともとあったもので、これも主郭の大きな土塁として利用したものであろう。現在は広瀬神社となっている。また、城下町は広瀬城の東に展開させることになった。

全体に遺構とはぼしいが、堀の跡が道となっていてわずかに塁線をたどることができる。築城開始から一年余りで建設中止になったので、未完成のゆえもあって遺構は少ない。



注

1. 城下図は日高次吉家に伝わったものである。現在は宮崎県立博物館に寄贈されている。



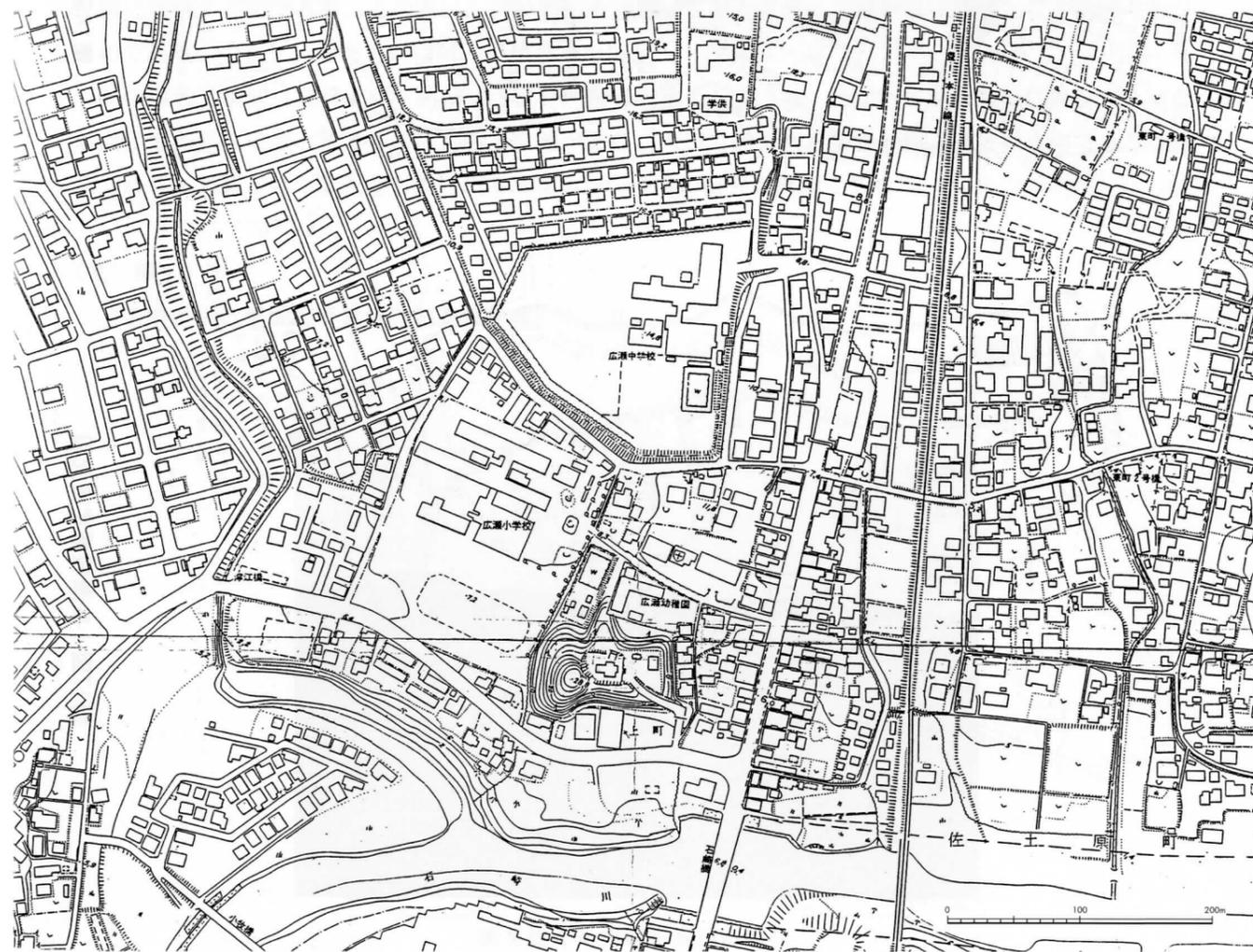
〈歴 史〉

明治維新の威信戦争で各地を転戦した佐土原藩主の島津忠寛は、旧来の人心と一新する目的で明治二年（一八六九）広瀬に転城することになった。許可願には、佐土原城は「空気悪敷不便」としている。実体は人心一新とともに、石崎川の河口近くであること、佐土原の一ツ瀬川の川港福島を抑えるためであったろう。また、一ツ瀬川と石崎川の間には運河をつくり、両河川を一体化させようともしていた。

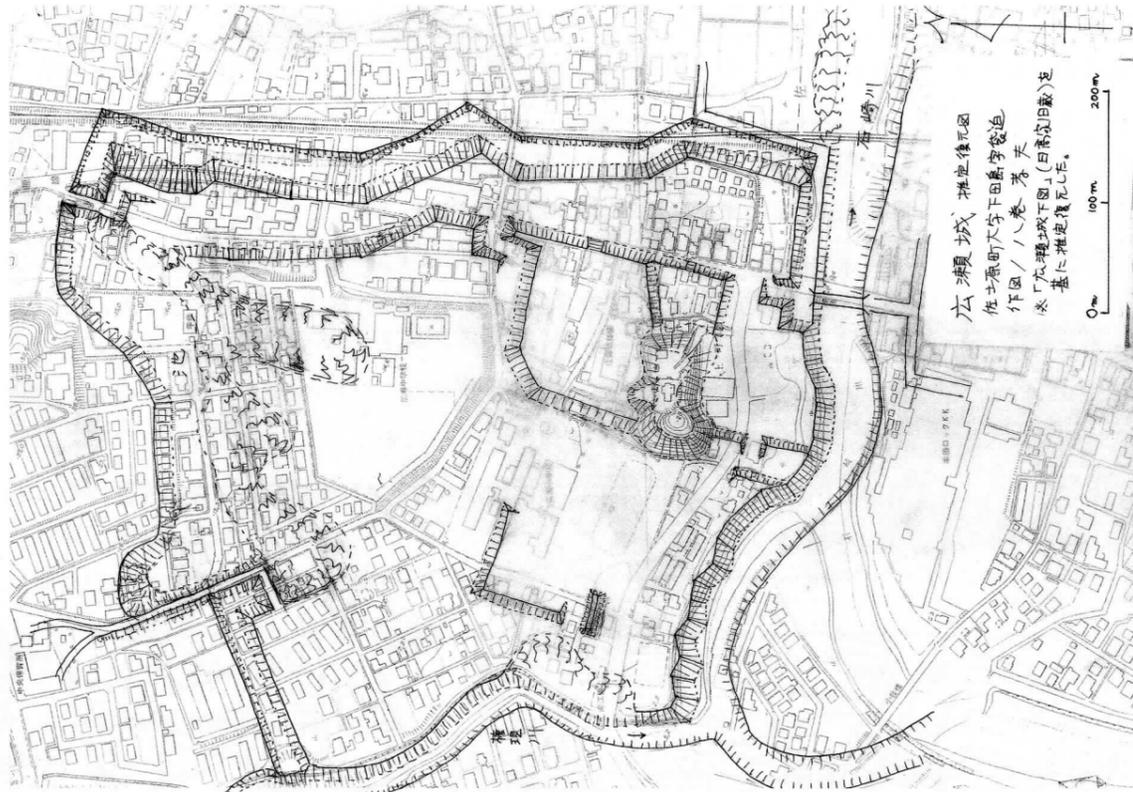
築城の縄張は先述したように藩士の森五太夫高助が担当し、築塁は藩士の金丸惣八が総監督であった。しかし、広瀬城は築城途中の明治四年に佐土原藩が廃止となり、建設中止となった。そのため、どのような建物があったかも不明となってしまった。

〈文 献〉

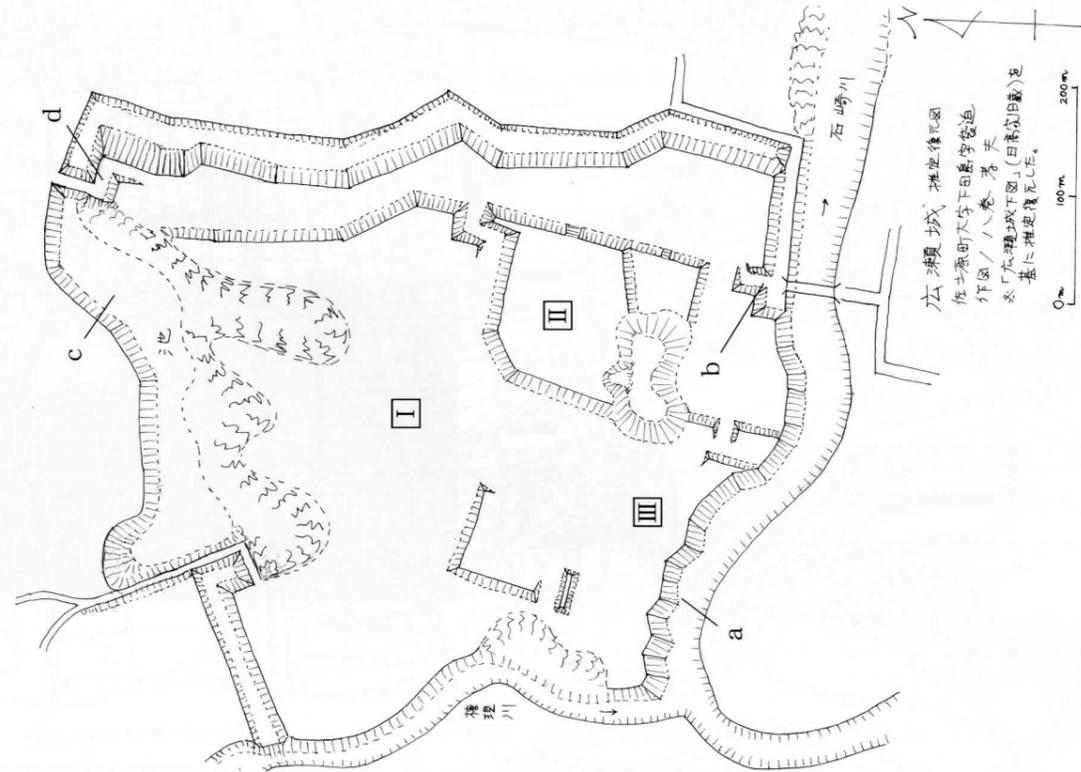
『佐土原町史』、『佐土原藩史』、『日本城郭大系』、『宮崎県中近世城郭緊急分布調査報告書』Ⅰ、Ⅱ



第16図 広瀬城推定地現況図



第18図 広瀬城を現在の地形図に推定で載せた図



第17図 広瀬城推定復元図

13 囲 (かこい)

〈別 称〉

なし

〈所在地〉

大字下那珂字囲

〈構 造〉

石崎川の川跡が馬蹄形にめぐった地で、囲の地名がある。城とすれば、この川跡を堀として利用したと思われる。かなりの要害であるが、既の中に施設が建設されているためもあり、確実な城郭遺構は認められない。

〈歴 史〉

歴史は全く不明である。この囲は、宮崎県の中近世城郭調査の折に、城館関連地名としてあげられたものである。しかし、館あるいは城との伝承もない。

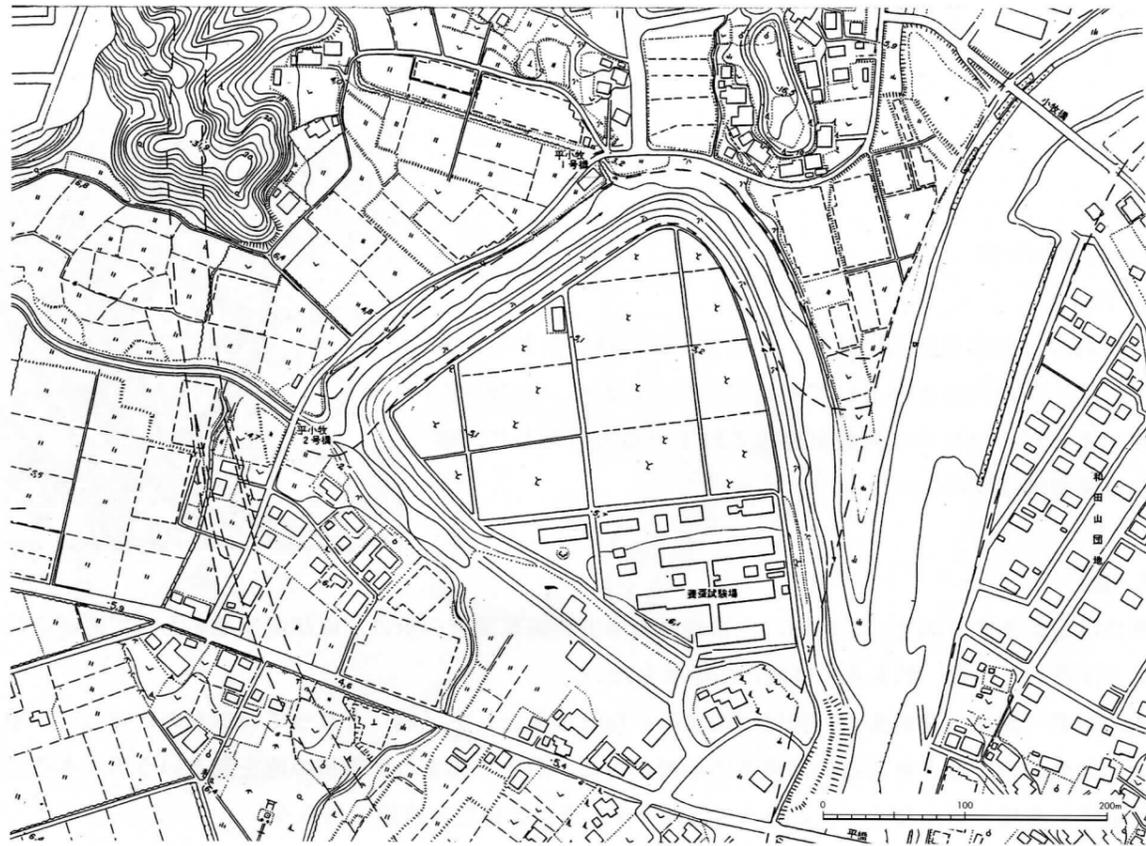
囲の地名で圍城（宮崎市）、圍城（国富町）など伝承として「城」となっているものに対して、単なる囲の地名のみで城と考えるのは再考の余地がある。河川で囲まれた袋状の地を囲というのであろうから、必ずしも城と考えなくてもよいのではないか。今後の研究の課題であろう。

〈文 献〉

『宮崎県中近世城館緊急分布調査報告書』Ⅰ、Ⅱ



囲をめぐる川跡を西から臨む



第19図 推定地現況図

14 古城 (こじょう)

〈別称〉

なし

〈所在地〉

大字下田島字田島

〈構造〉

現在地区の鎮守として大切にされているのが曾我殿の墓であるが、その墓地の周り一帯が古城の地名の地である。しかし、居館の地にしては狭すぎて使えない。山上は狭いが、いつの時代か庭園として利用されたのか、水がわくため円形の池がつくられている。城としての遺構は確認できなかった。また尾根続きにやや広い台地はあるが、城としての遺構は発見できなかった。

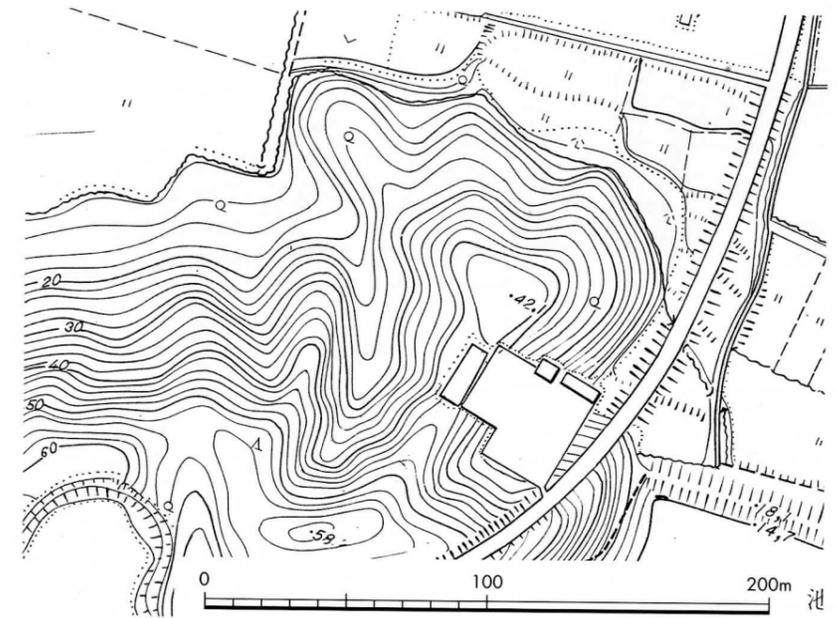
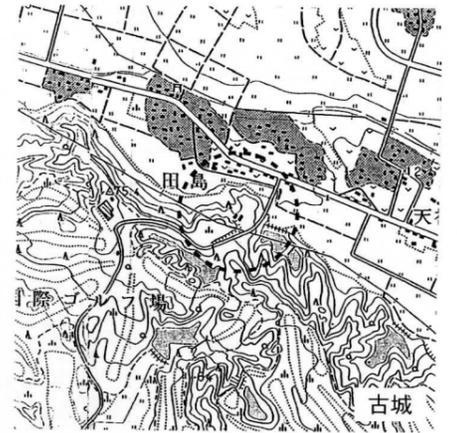
遺構は確認できないが、地名からすればこのあたりの山に居館があった可能性はある。

〈歴史〉

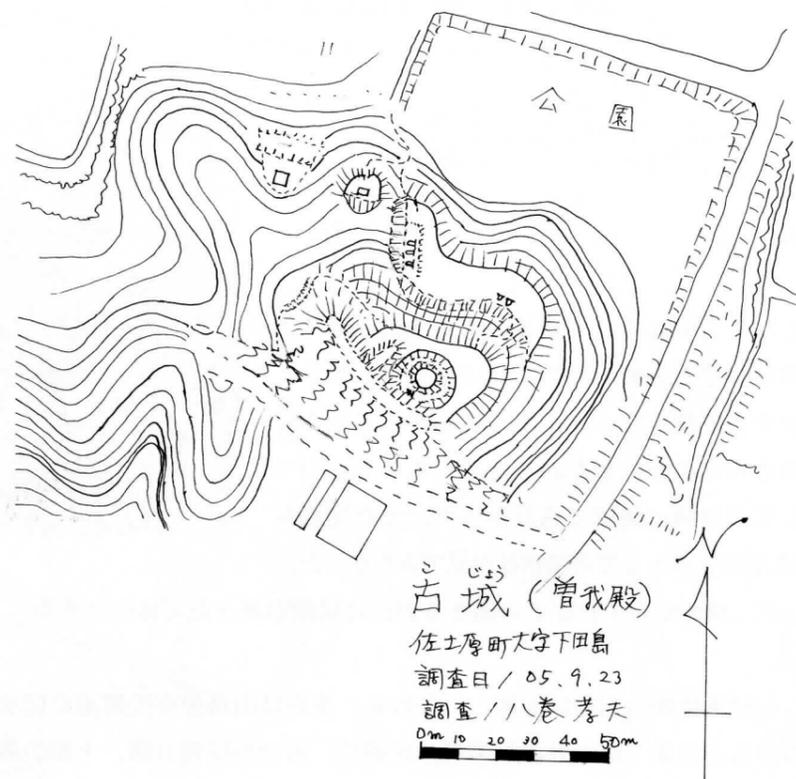
鎌倉時代に下向した伊東祐明の初期の館跡といわれる。現在は田島伊東氏関連の伝承がある五輪塔六基と三重層塔四基がある。伝承では中央の五輪塔が虎御前、両側が曾我五郎、十郎の墓と伝えられる。初期の田島伊東氏の居館地なので、田島伊東氏の墓がまつられた可能性もあり、館の遺構はないものの無下に否定はできない。周囲も含め、注意する必要がある。

〈文献〉

『都於郡伊東興亡史』、『佐土原町史』



第20図 古城推定地現況図



第21図 古城推定地見取図

古城 (曾我殿)
 佐土原町大字下田島
 調査日 / 05.9.23
 調査 / 八巻 孝天
 0m 10 20 30 40 50m

15 古館 (ふのたて)

〈別称〉

なし

〈所在地〉

大字上田島字古ノ館

〈構造〉

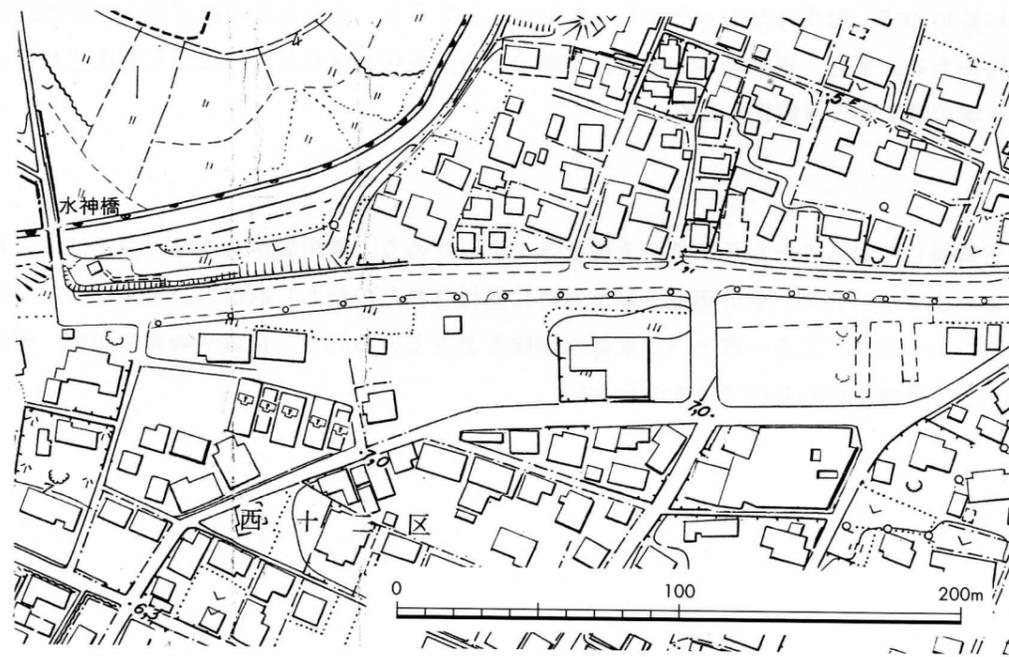
三財川に流れ込む追手川に面した地で、聞き取りによりわかった地名であるが、一切遺構はない。追手川に突き出た台地がこの古館の地と思われる。

〈歴史〉

地名の伝承だけなので、歴史含めて不明である。漢字の「古館」からすると、古い館ということになるが、古代から中世には館は貴人の家の意であるので、それが転訛して館となつた可能性がある。また一方で、「館」を「たて」と読むのは、東日本に集中していて、西日本には見られない地名である。中世から近世にかけて東日本では「館」は、ほとんど西日本の「城」と同義語である。この伝承地名が漢字と読みが正しいとすると、最初に田島に下向した伊東祐明の居館で、東日本から持ちこまれた地名という考え方もできる。今のところどちらとも決めがたいが、場所は一ツ瀬川に面しており、流通を抑えるにはかなり良いところである。後考を待ちたい。

〈文献〉

なし



第22図 古館推定地現況図

16 嶺ヶ城 (みねがじょう)

〈別 称〉

なし

〈所在地〉

大字下那珂周辺

〈構 造〉

場所は不明である。『日向地誌』の「下那珂村」の「山」の項に次のようにある。

「城ヶ岡 本村ノ南ニ連ナル高九丈岡上に四城アリ 北ナルハ嶺ヶ城 其次ハ諏訪城…」

これにより嶺ヶ城は城ヶ岡の北にあり、諏訪城の北に隣接しているのがわかる。また、「古迹」の項では次のようにある。

「嶺ヶ城墟 城ヶ岡ノ北畔城阪ノ南ニアリ其巔平坦広凡一町」

この文の後諏訪城、中ノ城、端ノ城とあり、それぞれが堀をへだてて接している」と記している。これは本書の那珂城の項で述べたように、那珂城の各々の曲輪を指している」と解釈できる。嶺ヶ城の場合は、この曲輪群のようには接していず、やや離れているが、同じ城ヶ岡にあるのがわかる。現在城ヶ岡の地名はないが、那珂城と同じ岡の内東半分を城ヶ峰と呼ぶ。岡と峰の違いはあるが、「城ヶ岡」をある時点で「城ヶ峰」と表記するようになり、それがいつのまにか漢字にひばられて、城ヶ峰になったのではなかろうか。とすると、この城ヶ峰の北の平坦な岡の可能性もある。しかし現在は耕作され城としての遺構は発見できなかった。ただ『日向地誌』の記述は、巔が平坦といっているだけで、堀切の有無にはふれていないので、堀切はなかったかもしれない。とすると、もともとさほどの土木の普請はしていない可能性もある。また、那珂城の北に連なる岡の上も、現在工採りなどによって破壊されているが、ここも嶺ヶ城の地である可能性もある。

〈歴 史〉

那珂城と隣接していることから、その支城とみてよいだろう。那珂城からは城ヶ峰にはばまれて東の展望があまりよくないので、その弱点を補うために築城されたのかもしれない。全体にあまり普請はしていなかったようだが、広さ一町という大きな面積をとっているので、兵員や物資の収納、周辺の住民の避難所として築城されたものではなかろうか。

〈文 献〉

なし



第23図 嶺ヶ城推定地現況図

IV 佐土原城跡天守台に関する文書

文献

佐土原城の天守について書き残した文献のうち、相対的に史的価値が高いと思われるものに、「旧事集書」と「御家記」がある。

「旧事集書」は二巻からなり、「旧事雑記」一卷とともに、佐土原藩の八代藩主島津忠持の命によって一八一〇年代に撰修されたもので、佐土原藩の主なできごとを集めている。この書は忠持の次男久徳が拝領し、その後写本がつけられた。現存する写本のうち、県立図書館所蔵のものは天保八年（一八三七）に写され、佐土原城跡歴史資料館所蔵のものは文化九年（一八一二）に写されたものである。内容はほとんど同じであるが、ここでは歴史資料館所蔵のものを引用する。

「御家記」は高月院（初代藩主島津以久の菩提寺）所蔵のもので、上、下巻からなり、上巻は以久の父忠将と以久時代のできごとを、下巻は二代藩主忠興から番代久寿までのできごとを撰修したものである。元禄六年（一六九三）の写本であるが、下巻の内容が元禄六年のできごとで終わっていることから、撰修が完了すると同時に写されたものと思われる。この写本が原本の完成と同年のものであるのは、高月院が以久の菩提寺であったからであろう。

史料1 旧事集書 巻一

鶴山南之城、鶴松城と云

元来此城は伊東義門の臣、角隈石宗と云人縄張二て築所の新城也。然るに佐土原休助と云人、伊東氏と婚姻を結び婿舅の引出物に此城を休助に送り遣す。其後天正の初に、五年丁丑十二月、伊東家没落以後御代官持也しを天正十三年の頃嶋津中書の御在城となり慶長年間、五年後庚子九月十五日、中務太輔関ヶ原御戦死之後、御年三拾三二て御戦死、又しハらく庄田三太夫と云人御代官持也。慶長八年十月十八日以久公 家康公より此佐土原を賜ハリ此鶴松南の城へ御在城也。其後以久公御晩年に及ひて此鶴松城を山下平地に御移なされ度よしにて代々宇津狩之介に被 仰付寛永二年冬之頃唯今の山下に御引移し築直し候より鶴松城と云。（中略）

一 天守台の跡山の北に有、式重天守は石垣の跡有、此左右塀五百間餘有たるよし。唯今石の多く積重有所ハ権藤大学石垣を築事上手にて谷山五右衛門杯稽古の為処々に有し石を起し取て石を疊稽古せし跡也。夫より内に天守は有たるよし此切石は細嶋石のよし。

史料2 御家記 下巻

一 慶長十六十七年之間権山清左衛門久成ヲ奉行として佐土原之城郭を修補し玉ひ天守を立櫓塀門等ヲ拵て忠興公南之丸ニ移せ玉ふ。是垂水と不和之儀ニ依て御用心之為也とそ。

V 佐土原町内の主要城館の航空写真と絵図



写真2 内城

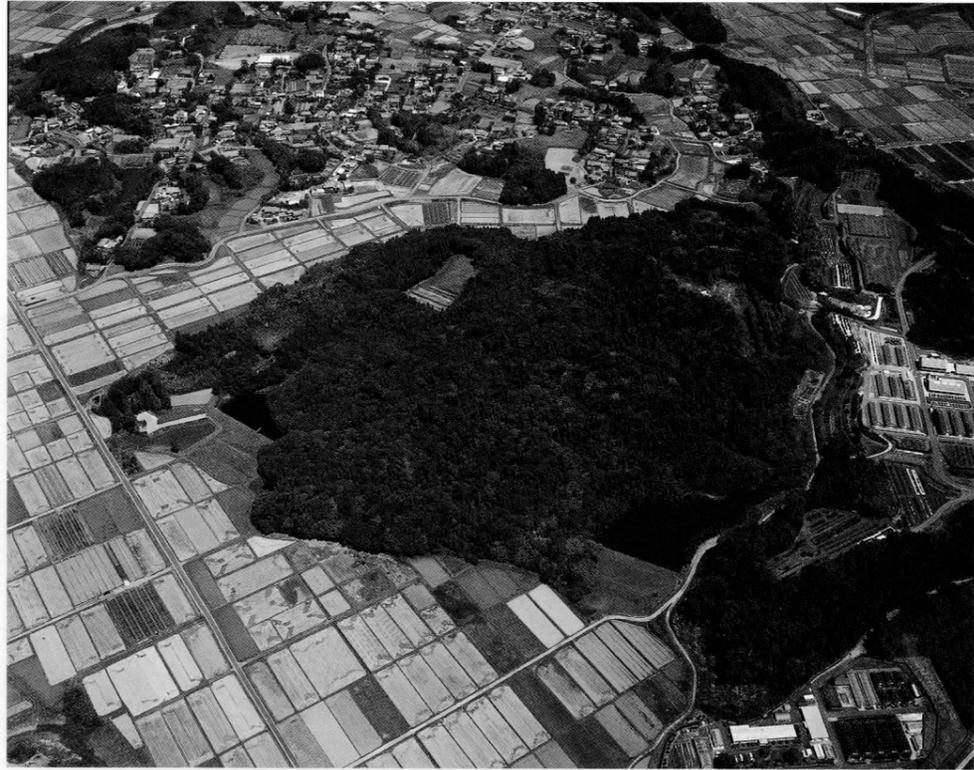


写真3 那珂城



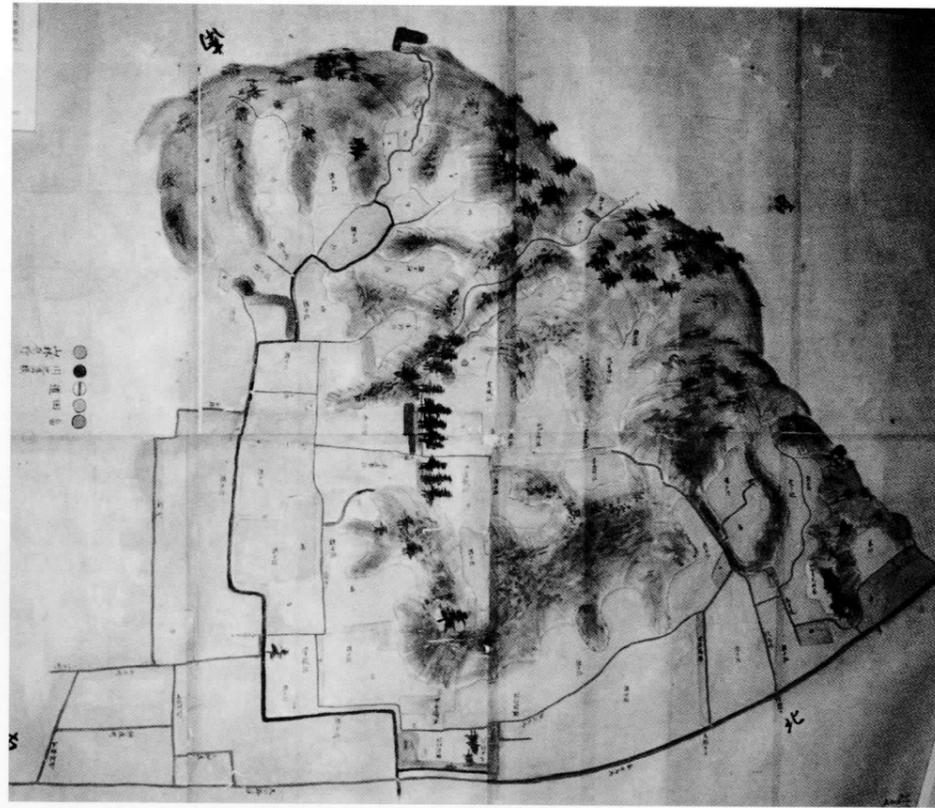
写真4 内田城



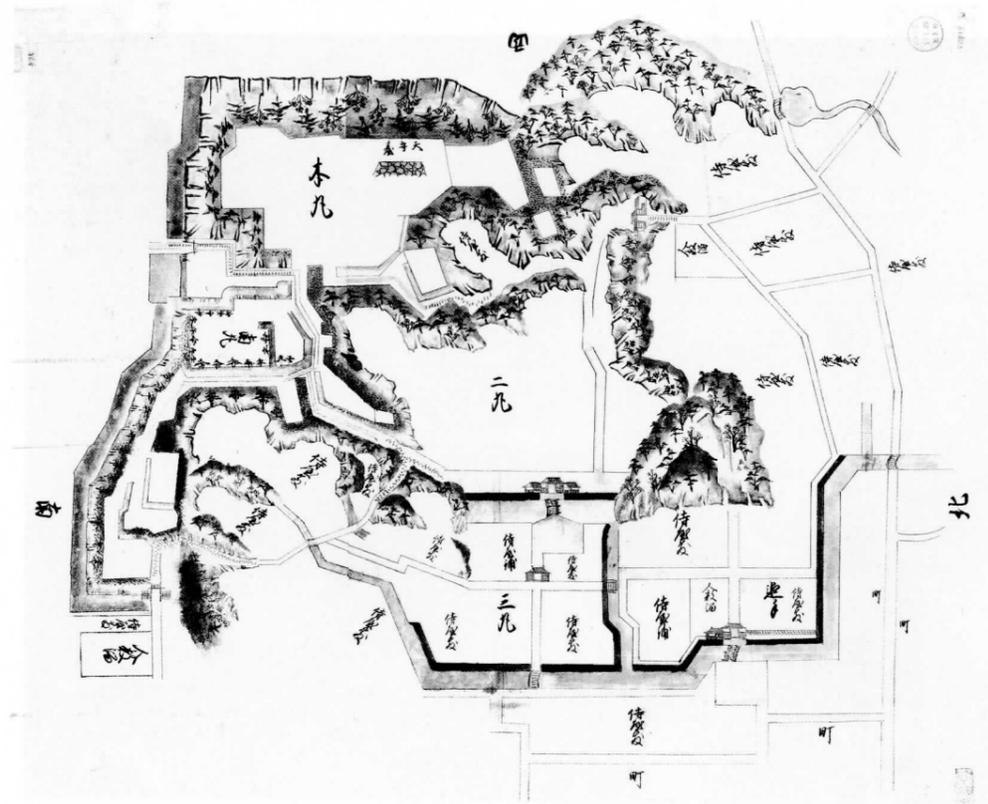
写真5 西ノ城



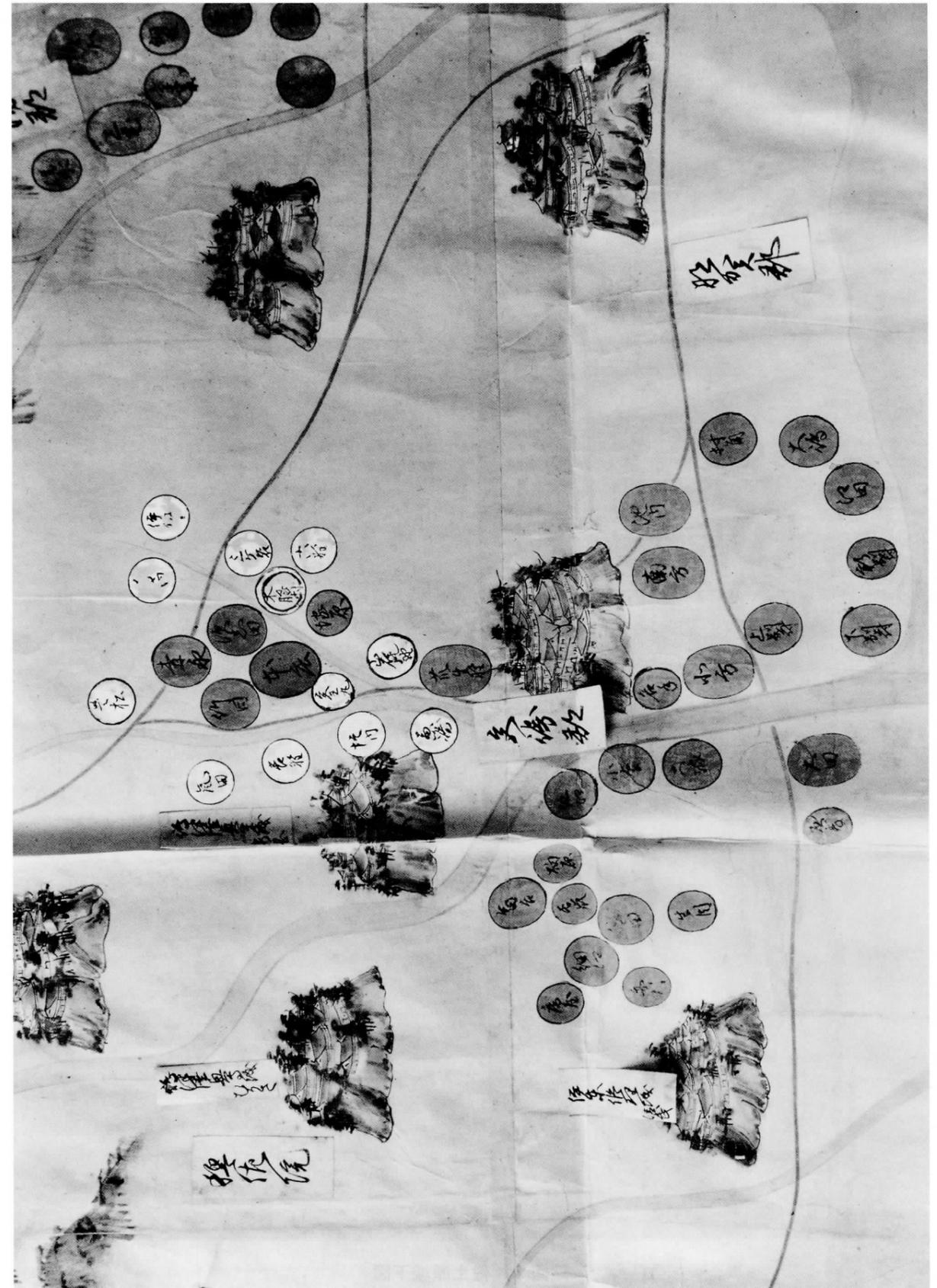
写真6 福城寺



絵図2 明治三年廃城後図（佐土原廃城後絵図）

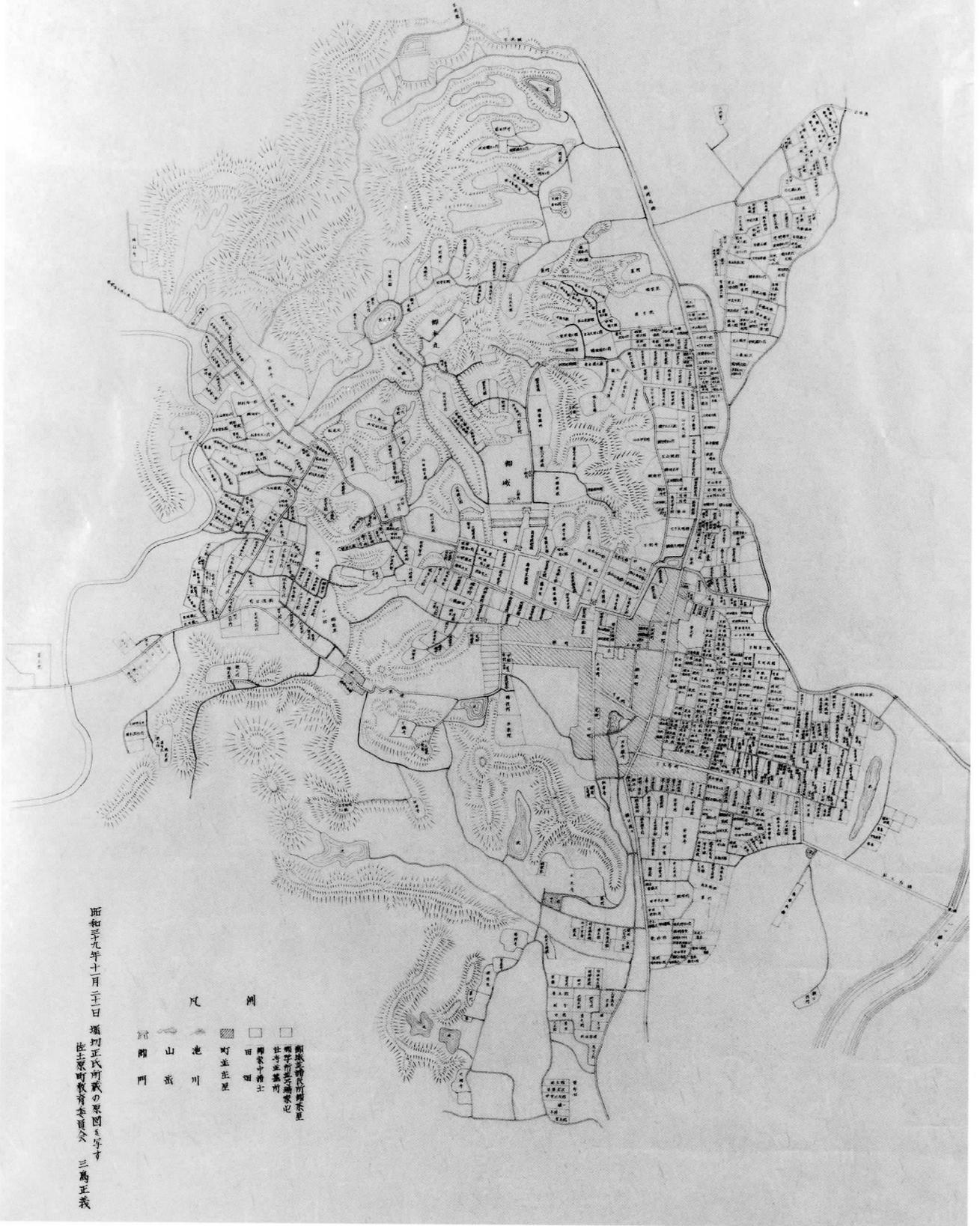


絵図3 日向国佐土原城



絵図4 慶長日向国絵図（佐土原城は右はし）

佐土原城下図



絵図 5 佐土原城下図

